

未公刊資料の解読によるナチズム期ゲッティング教育学派の
政治的教育学的立場の研究

(研究課題番号 09610261)

平成9～10年度 科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))

研 究 成 果 報 告 書

平成11年2月

研究代表者 坂 越 正 樹
(広島大学教育学部助教授)

はしがき

研究組織

研究代表者 : 坂越正樹 (広島大学教育学部助教授)

研究経費

| | |
|--------|---------|
| 平成 9年度 | 600千円 |
| 平成10年度 | 500千円 |
| 計 | 1,100千円 |

研究発表

(1) 学会誌等

坂越正樹「ナチズムと教育学 ― ヘルマン・ノールのケーススタディ ―」
教育思想史学会年報『近代教育フォーラム』第6号、1997年
10月17日、(1-15頁)。

坂越正樹「ナチズムとH. ノール教育学(3) ― ノール学派とE. ヴェ
ーニガーの『軍隊教育学』 ―」中国四国教育学会編『教育学研
究紀要』第43巻、第1部、1998年3月21日、(23-
28頁)。

(2) 口頭発表

坂越正樹「ナチズムとH. ノール教育学(3) ― ノール学派とE. ヴェ
ーニガーの『軍隊教育学』 ―」中国四国教育学会第49回大会
(於: 広島大学教育学部)、1997年11月9日。

(3) 出版物(翻訳)

ハインツ・エルマー・テノルト著、小笠原道雄・坂越正樹監訳『教育学に
おける「近代」問題』玉川大学出版部、1998年、7月1日。

第1部 ナチズムとノール教育学

1933年1月30日、ヒトラーが大統領ヒンデンプルクの任命を受け、首相に就任した。さらに、2月27日、国会議事堂放火事件が起き、総選挙の結果、ナチス党が国会で43.9%の議席を占めた。3月23日、国会で「全権委任法（民族と帝国の困難を除去するための法律）」が可決され、つづいて3月31日、「強制的同質化法」、4月7日、「職業官吏の現状回復に関する法律」が可決されて、非ナチズム的と見なされた勢力が圧倒的な力をもって駆逐されていった。ナチズムの暴力性が顕現化し、国家システムとして機能しはじめた年と言えよう。第1部では、ナチスの政権掌握後、その「野蛮性」が現実のものとなって教育学者にも迫ってきた時期のノールの言行を分析し、その親近性と隔たり、ナチズム期ノールの精神的位相を明らかにする。

第1章 ナチズムとの非連続性

1. ナチズムへの批判と外面的適応

本論文の冒頭、課題設定において、1985年頃からドイツ教育学において大きな問題圏となっている精神科学的教育学とナチズムとの関わりを、一方での、精神科学的教育学の代表者たちの中心的な政治的、教育的原理と、ナチズムの政治的、教育的綱領との間には類似性があり、部分的には一致しているという「連続」の立場、及び他方での、両者の間には確かにある類似性や共通点が存するが、精神科学的教育学の基本的思考はイデオロギー化された教育のナチズム的綱領とは相容れないもので、アンヴィヴァレントな一時期を除けば、両者は「非連続」であるという立場とに図式化した。

ノールをこの図式の中に配置すれば、以下のようなだろう。「連続」の立場では、ノール生誕100年を機として開催されたコロキウムにおいて、Th. シュルツェが報告を行っている。彼によれば、ノールはナチストでもファシストでもないが、「革命、民主主義、政党に対する彼の反感」は明らかであり、ノールの「ドイツ民族の保持と統一への政治的方位づけ」が、ナチズムに対する彼の態度を曖昧なものにした*1とされる。ノールは、ナチズムを民族教育学的目標設定をもった支持可能な政治勢力と見誤り、ナチス統治の抑圧的性格に迎合した、と判定されるのである。この立場によっても、ノールが当初ナチズムに抱いていたシンパシーは、次第に懐疑的なものに変化していくとされるが、その時期については確定されていない。

それに対し、ノールの弟子たちの多くは当然、「非連続」の立場をとり、彼が「理性的

*1 Schultze,Th.: Bericht. Kolloquium zur wissenschaftlichen und aktuellen Bedeutung der Pädagogik Herman Nohls. In: Neue Sammlung, 27.Jg., nr. 6., 1979, S.574.

共和主義者」であったことを主張する。彼らによれば、ノールとナチズムとの親和性は認められず、むしろ彼はそれに対し拒否的態度をとっていた。ノールは自己自身と協力者、学生たちの限られた活動空間を守るといふ、戦術的理由からナチス統治に対する外面的適応をした^{*2}、とされるのである。このような「非連続」の立場は、ノールと日常的に接していた弟子たちの記憶、ノールから彼らに送られた手紙、さらにノールの個人史的事実を、その大きな論拠としている。

確かに、ノールの個人史を見れば、彼は夫人の家系のゆえに子どもたちをイギリスに避難させざるをえなくなり、K. ハーンの学園に寄宿させている。そこで、子どもたちは、同様にオックスフォードに移住を余儀なくされた弟子のE. ブロッホマンの配慮を受けて生活したのである。ノール自身、1937年に通例よりも早期の退官を迫られ、後には大学教員としては例外的に工場動員までされている。さらに、ノールがユダヤ人学生に見せた個人的配慮、またナチズムの側からも、彼がけっして好ましい人物と見なされたことはないという事実から、「非連続」の立場は補強されるように思える。

しかし、このようなノールの個人史的出来事が、かえって彼の教育学者としての言説の意味を見えにくくしているのではないであろうか。後述するように、ノールの公的な教育学的言説と私信に見られる彼の思いとの差はかなりのものであり、それがナチズムに対するノール教育学の関係規定を二面的なものにしている。いずれせよ、クラブキも指摘するようにノールは、E. シュプランガー、W. フリットナーに比して、ナチズムとの関係問題についていまだ厳密に評価されていない。とりわけ、1933年から1935年にかけての彼の言行は二面的で、より詳細に分析される必要があるだろう。

2. ノール書簡の分析

1933年から1935年頃にかけてのノールの私信からは、次節で考察するような教育学的言表に見られる態度とは異なり、ナチズムに批判的距離をとるノールの姿が浮かび上がってくる。ブロッホマンは、この時期のノールの様子を、「新たな権力掌握者の暴力的方法に対する精神的人間の無力さを知り、深い失望の中にあつた」^{*3}と記している。ゲッチンゲン大学からナチスのユダヤ人排斥によって、親友のM. ボルンや、ノールをゲッチンゲンに招聘してくれたG. ミッシュが追放されても、何ら有効な抵抗をすることができなかったのである。

「家庭も仕事も妨げられている — 私の周りのほとんどすべての人々が解職された。彼らは私だけを講座に置き去りにしたかのようだ。夏の間、私は静かな絶望の中で私の美学研究をすすめていた。」(1933年10月3日付け、パラート宛)^{*4}

「大学は全体として日に日に崩れ落ちていく廃虚だ。それはとりわけ、そのヒューラーが

*2 Blochmann, E.: Herman Nohl 1897-1960: Göttingen 1969, S.163-.

*3 Dies.: a.a.O., S. 164.

*4 Dies...: a.a.O., S. 165.

・・・彼自身学問を信じていないことによる。大学は固有の魂を欠くとともに何らの自律的インパルスもない。それに加えて、多くの指導的人物の損失・・・すべての者に覆いかかる配置転換の暗雲。こうして全体的無気力が生じた。・・・生き生きとしていたすべてのものは『疑わしい』。もっとも悪質な旧いドイツ民族の反動主義者が表を支配している。」
(1934年12月24日付け、パラート宛) *5

「復活祭には私の付属学級を閉鎖しなければならない。・・・私の子どもたちは世界に散らばっている。不安は時に大きくなる。」(同上)

パラートは、ハレ大学のクラトール(事務局長)を務めるとともに、「ベルリン教育・教授センター」の創設者の一人であり、ノールとともに『教育学ハンドブック』全5巻の協同編集者であった。ワイマル共和制文教政策にも関わったノールの盟友と言ってよい人物である。これらの手紙からは、ナチズムへのシンパシーはまったく読みとれない。1937年3月20日付けの手紙では、「大学は蛆がはいまわる死体のようにひどい」*6と訴えている。

さらに、1934/35年にはナチス党员である医師の教授資格論文審査をめぐって、次のような出来事が起こっている。W. ゲントは1934年11月6日、ヒトラーに請願書を提出し、彼の教授資格論文「空間と時間の哲学」が否認されたことについて不満を申し立てた。論文の審査には「二人のユダヤ人教授と一人の非ユダヤ人で極端な社会民主主義者が関わっていた」*7 というのである。極端な社会民主主義者とはノールをさし、しかも彼は「ナチス統治が我々にとって深刻な不幸である」という講義を行ったとされていた。この非難に対し、ノールはゲッチンゲン大学哲学部長に宛てて、次のように答えている。

「私はけっして社会民主主義者であったことはない。なぜなら、私は国民全体の側に立たねばならない科学的教育学の主唱者として、一つの政党に所属することを常に基本的に否定してきたからであり、そのみならず、私は事実として常に別の信念を持っていたからである。」(1935年2月10日付け、ゲッチンゲン大学哲学部長宛) *8

「私は、私が行ったとされる講義をしてはいない。なぜなら、私は私の倫理学、教育学講義において原則的に一度も政治的な今日の問題について語っていないのだから。」(同上)

ここにはノールの政治的姿勢が提示されている。もちろん、それはノールとナチズムを「連続」と見る立場から批判されるように、政治的中立を称することによって、結果として一定の政治的選択をするという脆弱さははらむものである。またノールの言葉からは、

*5 ebenda.

*6 ebenda.

*7 Kupfer, H.: Der Faschismus und das Menschenbild der deutschen Pädagogik. In: Otto, H.-U./ Sünker, H. (Hrsg.): Sozialarbeit und Faschismus. Bielefeld 208.

*8 ebenda.

彼がナチスを刺激しないよう、解職の強制的措置を招かないよう、用心深く配慮していることが伺える。そこにノールの迎合的態度を認め、批判することも可能であるが、また同時に、困難な状況の中で自己の教育学を継続しようとする努力としても解釈できよう。

1937年3月30日、ノールは「ドイツ大学制度の新生に関する大学教官の解任と配置換えについての法律」(1935年1月21日布告)によって、解職を通知される。当時ノールは57歳であり、同法第1項に規定された65歳免官の通例からすれば早すぎるものであった。同法第4項によれば、講座が新たな編成のために廃止されたり、他の専門領域に移設されたりした場合、それまでのポスト保持者は職務から免除されることが規定されていた。ノールの場合、彼のポストは「政治的国民経済学及び財政学」に割りあてられ、法・国家学部に移されることになっていた。なぜこの時点でノールが解職されたのかという理由は明確ではないが、推測として、ナチスは元来、彼を好ましからざる人物と見なしていたこと、教員養成を教育アカデミー(Pädagogisch Akademie)と大学(Universität)の関与する領域から、ナチス的色彩の濃い教員養成大学(Hochschule für Lehrerbildung)へと転換しようとしていたこの時期が、ノールを教職から遠ざける格好の機会であったことがあげられている^{*9}。ブロッホマンはノールの書簡を引用して、ボイムラーの関与を暗示している。その書簡には、ノールが友人から聞いたこととして「ボイムラーの意見書によって暗雲が立ちこめつつある」^{*10}と記されていた。ノールの解職後、ゲッチンゲン教育学インスティテュートは閉鎖され、施設はナチス科学アカデミーと哲学ゼミナールに接収された。

その後のノールは、残された少数のドクトラントの指導をするほか、1937年には雑誌『教育』の編集者も辞して、倫理学・美学研究、自らの家族史研究に専念する。すなわち「内的亡命」の道を選ぶのである。1943年、64歳のノールはゲッチンゲン教授の中でただ一人、工場労働に徴用されている。

第2章 ナチズムとの連続性

1. ナチズムとの親近性

ノールの私的な書簡や人事的動静からは、ナチズムに対する拒否的な姿勢が認められ、両者の「非連続」性を示していた。しかし、それとはまったく異なり、1933年(講演としては1931年)から1935年にかけて公刊されたノールの著作、論文、講演からは、「民族的高揚」のスローガンによってドイツ民族の統一を訴えたナチス政権に好意的関心を示す彼の姿が浮かび上がるのである。テノルトは、ナチズムと当時のアカデミズムの教育学との関係について、「個々の要素については連続性が認められるが、関係構造と

*9 Ratzke, E.: Das Pädagogische Institut der Universität Göttingen. In: Becker, H. usw. (Hrsg.): Die Universität Göttingen unter Nationalsozialismus. München 1987, S.209.

*10 Blochmann, E.: a.a.O., S.177.

しては非連続である」というテーゼを提示していた。非連続性とともにある連続性、すなわち個々の要素について、ノールの場合、それはいかなるものであるのか。以下のノールの教育学的言説の分析は、両者のかなり疑惑的な親近性を示すものである。

1933年以前のノールの教育学は、主観と客観、子どもと文化、個と全体といった両極的弁証法を基調として保持し、究極的には主観や子どもの側に立つことをもって、教育と教育学の自律性の根拠としていた。しかし、ノールにおいて「両極性」とは、そのいずれの極に重点が置かれるかを「歴史的時間」によって規定されるものとされていたのである。1933年の時点でのノールの判断は、個から全体への極の移動であった。

2. ノール教育学のテキスト分析

(1) 『地方運動、東部救援と教育学の課題』^{*11}(1933)における言説

この著作は1931年と1932年のノールの講演を収録したものである。表題となった講演は1931年夏、社会活動団体の集会でのものであり、テーマは「東部の困窮」、ドイツ人の移動によって空白となったドイツ東部地域の「文化的荒廃」であった。ドイツは、第一次世界大戦の敗戦、そしてヴェルサイユ条約によって、広範な東部領土を失った。そこでは、多くのドイツ人が土地を離れてワイマル共和国領内に移住したり、また残ったドイツ人たちも離散と少数民族としての苦しみを味わっていた。ノールは「東部における統一的文化構築」の国民的な教育学的プロジェクトを提唱し、そこに国家の緊縮財政に圧迫されていた社会教育活動と、未来を喪失した青年を救うという期待をかける。「危機」の中に、青年の熱狂を全体のために呼び起こし、国民に未来のプログラムを知らしめる教育学の「愛国的」課題があるというのである。

このような主張は、同盟青年の民族派やフェルキッシュな陣営が訴えていた東部論議、さらにナチス政権の呼号するドイツ民族の「生活圏」保障論につながるものである。そこに、社会教育活動を越えて国民的、愛国的教育学へと踏み出したノールの姿を認めることもできよう^{*12}。ノールは、ポーランドとの微妙な関係状況の中で「東部に再び住民を移住させ、その地を愛してそのために鋤と武器を持って戦う準備をする」こと、「ここではロマン主義は助けにならない、労働せねばならず戦わねばならず、かつてドイツの青年が塹壕にあったように耐えねばならない」ことを主張する。東部への愛国的な教育学の侵攻は英雄的行為であり、「文化構築」は「我々の愛国的意志を目覚まし、すべての党派的分離を越えて民族と国民の内的統一を生じさせる偉大な仕事になる」^{*13} というのである。

さらに次のような言説は、ナチズムに対するノールの姿勢をより明確に示している。

「今日、青少年をナチズムに熱狂させているもの、そしてすべての教育者がそこで是認しなければならぬもの — たとえナチズムの扇動的実践、その暴力的方法、唯物主義的人

*11 Nohl, H.: *Landbewegung, Osthilfe und die Aufgabe der Pädagogik*. Leipzig 1933.

*12 Zimmer, H.: *Die Hypothetik der Nationalpädagogik*. Herman Nohl, *der Nationalsozialismus und die Pädagogik nach Auschwitz*. In: *Jahrbuch für Pädagogik* 1995. Frankfurt/Main 1995, S.91.

*13 Nohl, H.: a.a.O. (1933), S.32.

種論については拒否的態度をとるにしても —、それはナチズムが政治的闘争を越えたところで、心的精神的諸力を経済や政治に対抗する決定的なものとして認め、時代の課題を再び偉大な教育の課題と見なしていることだ。」^{*14}

このようなナチズムを条件付きで肯定するノールの立場は、1932年の論文「教育運動の中での国民教育の活動」においても示されていた。ここで言う「時代の課題」とはすなわち、「人間と民族の形式が何よりもまず内側から変えられねばならない」というものである。ここにはナチズムの人種主義、暴力性に対する批判的距離とともに、それ以上のナチズムへの親近性が認められる。つまり、ナチズムが民族の新生の前提として人間の内的変革をめざすかぎり、それはすべての教育者によって支持されうるものと見なされているのである。さらに現実の政党政治が「精神世界」によって超克されねばならないとされるなら、それはナチズムの共和国攻撃と同調しあう政治的選択となる。

また、ノールは改革教育運動の精神がナチズムによって引き継がれ、実現されたことを是認する。

「戦後以来の青年運動、民衆大学運動と連合して教育運動が取り組んできた多くのことが、突然手の届くところにきている。政治的な力が一挙に国民教育の基本的前提である意志的統一を実現した。力が抜きんでた教育学的意義を有することは、いまだそれを知らなかった者にも、今やもっとも壮大な形で掲示された。誰か、心臓と頭のこの『同質化 (Gleichschaltung)』の止めるものがない勢いを感じなかった者があるだろうか。あらゆる形態の分立主義の克服、及び新しい民族の生成は、すべての者にとって明らかである。」^{*15}

この言葉は、教育運動の理念がナチス体制に引き継がれ、統一的な国民教育が実現されるという期待を表明したものにほかならない。ノール学派のブロッホマンは、この言葉に変化した状況のもとでなお教育学的責任を果たそうとする者へのノールの励ましを見る^{*16} のであるが、やはりそれ以上に明らかに、ナチズムの国民教育的作用に対するノールの肯定的態度が読みとれる。

(2) 『国民教育の基礎』^{*17} (1933/34年、冬学期講義) における言説

ゲッチンゲン大学図書館所蔵のノール遺稿文書集の中に、これまで公刊されることのないノール自身の1933/34年冬学期の講義録が残されている。講義題目は『国民教育の基礎』とされ、ほぼ出版可能なテキストとして完成されたものである。そこでのノールの言説には、より明瞭で、踏み込んだナチズムへの親近性が認められる。すなわち、

*14 Ders.: a.a.O. (1933), S.75.

*15 Ders.: a.a.O. (1933), S.95.

*16 Blochmann, E.: a.a.O., S.172.

*17 Ders.: Die Grundlage der nationalen Erziehung. Eine Voelesung im Wintersemester 1933/34 (Nachlaß Herman Nohl, Cod.830.).

それ以前のナチズムに対する肯定的態度に付されていた一定の留保条件が取り払われているのである。

「我々が体験することを一言で特徴づけようとするなら、それは我々国民の生全体の情熱的集中であり、そこで教育は再び一つのものになる。——国民運動のヒューラーがそれを彼の『闘争』の中で、またその後くり返し彼の演説の中で強調している。——その手の中にけっきょく、全体の運命が安んじている。」*18（——部箇所は斜線が引かれており、実際に講義の中で述べられたか否かは不明）

「民族としての我々の現存在の構築の要素は・・・優生学と呼ばれるすべてのもの、つまり民族の生物学的器質、家族生活、世代の関係・・・及び、言語、神話、習俗、芸術、祝祭、故郷と呼ばれるすべてのもの、つまり民族的精神性である。」*19

そしてノールは、「民族的精神性」の中に「国民教育の基盤」が存するとして*20、この民族的精神性に基づいてこそ、「政治的教育、つまり我々の国家の意志統一と力の高揚へに向けてすべての生を意識的に整序すること」が可能になると述べる。この課題は、学校、青年運動組織、及び国防や労働などの「奉仕」という三つの形式で遂行されるはずのものであった。しかし、ノールの見るところ、この課題に対する青年運動と「奉仕」の成果は明らかである一方、学校には民族のあらゆる対立が凝縮されたままで、困難な問題状況が存していた。ここでノールの念頭にあったのは、「ワイマルの学校妥協」の結果、挫折した「統一学校」の構想である。そこで、1933/34年の時点で、次のような期待が表明されることになる。

「我々民族を毒し、この50年間の、とりわけ1918年以来の我々の教育的生を毒してきた分裂をここで絶つであろうという、大胆な期待が持たれてよいのであれば！」*21

この講義において、とりわけ問題となるのは優生学、人種学に関わる部分である。従来にも認められた文化批判的、反政党政治的傾向を越えて、ここでは、「民族の身体を正しく形成する」国民教育の基本的問題として「民族的健全性」が前提とされている。これはもはや言葉上の適応と見なされない。1933年7月、悪名高い「疾病遺伝防止のための法律」が布告されたその直後にノールの講義が行われているのである。優生学的、人種学的概念は、ノールにおいてこの講義以前には見いだせず、ナチスの「国民革命」に随伴してこのような国民教育の基礎づけを構想したものと考えられる。ノールは、「民族的身体の活気ある本質」を実現するために、民族共同体の生物学的保護、価値ある遺伝形質の危

*18 Ders.: a.a.O. (1933/34), S.6,7.

*19 ebenda.

*20 ebenda.

*21 Ders.: a.a.O. (1933/34), S.8.

機に対する闘いを勧める^{*22}。そして、「病的遺伝形質が人工的に保たれる現代文明」によって「病的、反社会的人間の子孫が健全な家族のそれよりも優勢となる」結果を嘆くのである^{*23}。ノールが民族的身体の正しい形成のために提案する対抗措置は、疾病遺伝の家系を絶つことと、社会福祉事業の根本的転換である。つまり、個人から家族へ、無差別的保護から遺伝的に健康な家族の保護への転換であり、「遺伝的に健康な家族は民族の本来的な生物学的生活単位であり、未来の民族の唯一信頼できる担い手である」^{*24}とされるのである。

人種的統一性の問題に関して、ノールは「生物学的に統一された人種的性格」の欠如をあげる。その克服のためにノールがとろうとする方法は、ローゼンベルク流の北欧化ではなく、民族の中に現在する人種の漸進的「同質化」であり、ここに新たな教育学の課題を設定するのである。さらにノールは言う。

「国民革命による一つのドイツ民族の創造、この大昔からの境界の破壊、それは種族や国の境界の破壊であるのみならず、統一的なドイツ民族感情、民族意志の形成でもあるのだが、これが我々の身体的統一のまったく新しい可能性をもたらす。このような内的同質化の榮譽を受けるべきは、東部に対する戦線を開いた人種政策であろう。そこでは、ドイツ人種政策を妨げ、我々の国民性の確立を解体するような、ユダヤ人そしてスラブ人の民族的要素がじゃまをしている。」^{*25}

これらの言辞を取り出してみれば、そこにナチズム的教育学との明瞭な境界線を引くことは、もはや不可能にさえ思われる。少なくとも1934年始めまでのノールの教育学的言説は、ナチズムの圧倒的な勢いに幻惑されていた、もしくは迎合していたと言えよう。

(3) 『ドイツにおける教育運動とその理論』^{*26}(1935)における言説

ノールの主著とされるこの著作は、1933年に公刊されたノール、L. パラート編『教育学ハンドブック』第1巻収録の2論文を1935年に単著として独立出版したものがある。ノールは1935年版に、次のような前書きを付す。

「新たな国民生成の問題を教育的方途によって解決しようとする試みは失敗した。けっきょく、政治がこの課題を引き受けた。・・・我々の国家が正当な理由をもって、独裁的な大衆指導を第一のそして決定的な手段とするなら、そしてそれが究極的なものを民族的に覚醒し、意識化し、我々国民に構造的統一を再び与えるなら、その際まったく新しい教育

*22 Ders.: a.a.O. (1933/34), S.15.

*23 Ders.: a.a.O. (1933/34), S.17.

*24 Ders.: a.a.O. (1933/34), S.21.

*25 Ders.: a.a.O. (1933/34), S.25.

*26 Nohl,H.: Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie. Frankfurt/Main 1935,1978(8).

学的課題と可能性が生じる。つまり教育運動の真の洞察がある形でやはりこの活動に入り込まねばならないであろう。」^{*27}

クラフキはこの言葉について、ノールのナチズムに対する態度に「不審の念を抱かせる」もの^{*28}、つまりナチズムへの同調性を暗示するものとしている。また他方でこの言葉は、「独裁的大衆指導」に「教育運動の真の洞察」を組み込むという意味において、ナチスのプロパガンダ技術に対する慎重な批判とも見なされうる。しかしいずれにしても、民族の統一というナチスのプロパガンダに教育運動の洞察を接合させるというノールの期待は明らかである。

またノールは同著の後書きでさらに明確にナチズムへの親近性を示す。この後書きは、先の講義録『国民教育の基礎』を圧縮したものと見なされる。その中でノールは教育学の二つの形式として、個人とその生を出発点とするソクラテス的教育学ないし「個人教育学 (Individualpädagogik)」と、全体及び国家を出発点とするプラトンの教育学ないし「国家教育学 (Staatspädagogik)」とを対比し、続けて次のように述べる。

「1933年春、我々のドイツにおいて教育学のソクラテス的形式がプラトンのそれに転換した。」^{*29}

「変革の合言葉になったのは教育の自律性であった。そのことがいかに突然起こったかを、次のことはよく表している。先の冬学期に未だこの自律性についての演習を行い、その射程を、残念ながらほとんど、誇張し過ぎていた大学教師は、夏学期の開講でそれを『磔』にした。それは構造的洞察としては、まさに数学的命題と同様に、歴史的発展をとおして真実でないとは言えない。それは単なる個人的確信の結果ではなく、自己発展する生の自己開示なのである。変化が起こったのだが、それは政治的意義のみではない。国防軍同様、教育もまた、それが一貫して固有の課題を保持し、まさにそれをとおして全体のために働くことによって、対立闘争から救われようとする。そのことは統一学校と全国学校法案をめぐる闘争においてもっとも明確になった。全体的国家は、それ（教育）を、今や生の他のすべての機能同様、直接的に奉仕させる。」^{*30}

今まで教育の自律性を唱えていた「大学教師」が、ここではその真理性を訴えながらも、教育的課題の変化の中で国家への奉仕を求めているのである。さらに、ノールは、教育運動の両極、すなわち個人、子どもの主観的生命性の極と、客観的全体、国家、民族共同体の極との間で、転換が生じたことを自ら表明している。

*27 Ders.: a.a.O. (1978(8)), S.228.

*28 クラフキ、W. 著、小笠原道雄編訳『教育・人間・民主主義』玉川大学出版部、1992年、177頁。

*29 Nohl, H.: a.a.O. (1978(8)), S.223.

*30 ebenda.

「今、構成された新しい客観的教育学の指導者はE. クリークであった。彼の著作は従来、彼が教育的関係、及び主観的教育学全体を否定するがゆえに、特別な教育的意義を欠くことが惜しまれていた。今や類型陶冶の彼の社会学的洞察は、従来歴史的にのみ理解されていたすべての教育の基盤として、国民教育にとって重要なものとなった。」^{*31}

「教育運動からこれまで・・・不安な面持ちで遠ざけられていた勢力が、突然宗教改革におけるように、同質化の力によって確信の基盤であると思われた。」^{*32}

「ナチス国家は、それがここでラディカルに機を失せず、あらゆる対立の上に全体性を確立するならば、いずれにしても教育運動の信念を背後に有している。ナチス国家は我々の歴史並びに我々の使命の内実において、統一的学校を担うことのできる基盤を備えている。」^{*33}

ノールは明確に、改革教育運動における国民の文化的精神的統一への努力も、ナチス国家によって実現されうるという期待を表明している。このような言辞について、ノールはナチス崩壊後の1948年、同著第3版の後書きで、それが著書の出版を可能にする「救命胴衣」であったと弁明する。

「3月にナチズムの政治的大波が押し寄せ、すべての真の教育を否定する脅威となった。私自身はその間まだ妨害されずにいたが、私の学派は迫害され私の弟子たちのほとんどすべてが職から追われた。私は彼らの運命に苦しみ、遅かれ早かれ私も沈没船上にあることを知っていた。そこで、私は少なくとも我々の仕事の意味をいま一度、いわば瓶に託された手紙のように最後の生のしるしとして世界へ送り出したかった。勇敢な出版社は危険を承知で刊行し、私はこの著書にまとめられたハンドブックの二つの論文に、あたかも救命胴着のように、それを水に浮かせる前書きと後書を与えた。実際、著書は出版禁止にはならなかった。私を圧迫していた金で動く批評家は、私が自己自身をそれによって『国民共同体から締め出した』と書いた。」^{*34}

しかし、先に1935年版から引用したノールの言葉はナチズムに対する儀礼的配慮以上のものである。確かにブロッホマンも指摘するように、1935年の後書きの中には、精神の自由な自己活動性は放棄されえないこと、自由な精神性が宗教裁判国家におけるように抑圧されるどころでは、破滅しかないことも述べられている。

「(ハイデggerが述べるように)『精神世界がはじめて民族にその偉大さを保証する。』『民族はその運命に働きかけ、その結果その精神世界を常に新たに闘いとる。』精神世界は、しかし単に意識的に造られたそのつどの歴史的現存在であるのみならず、最高次の歴

*31 Ders.: a.a.O. (1978 (8)), S.224.

*32 ebenda.

*33 Ders.: a.a.O. (1978 (8)), S.227.

*34 Ders.: a.a.O. (1978 (8)), S.229.

史的存在をめざす永遠の理想をも捉えようとする。民族がこのような自由な精神性を拒まれているところでは、例えばそれが宗教裁判国家におけるように抑圧されていたり、スパルタにおけるように評価されなかつたりすることによって、またくり返し存在の究極的基礎へと勇敢に突き抜けるラディカルなリーダーを欠くことによって、精神性が拒まれるところでは、破滅する。」^{*35}

ブロッホマンの擁護にもかかわらず、やはりこの精神性は、ハイデッガーの講演「ドイツ大学の自己主張」を引用することによって、その文脈の中での精神性となっている。つまり、ナチス統治のもとでも可能な、精神の自由な自己活動性なのである。

第3章 ナチス体制下のノールの精神的位相

1. 自己存在感の喪失

私的な書簡と教育学テキストに見られる相反したノールの姿、ナチズムに対する矛盾した態度はどのように解釈されうるであろうか。そこには、厳しい時代状況の中におかれたノールの精神的位相が表れていると思われる。ここではまず、ノールの教育学テキストから読みとられたナチズムへの迎合的言辞が、ナチズム的教育学の側ではどのように受けとめられたのか、について考察したい。結論的に述べれば、幸か不幸か、それはきわめて冷淡で批判的なものであった。ナチズム的教育学にとって、ノールの教育学はもはや過去の遺物にすぎないものと見なされたのである。

まず、ナチズム的教育学の代表的人物の一人であるA. ボイムラーが、ノールの『ドイツにおける教育運動とその理論』1935年版の出版に際して加えた書評をとりあげたい。ボイムラーは、1933年ナチスの政権掌握後、創設されたベルリン大学政治教育学講座教授職を任命された人物であり、シュプランガーのベルリン大学辞表提出のきっかけをつくったまさにナチス陣営教育学者である^{*36}。また、とりわけノールとリットを敵対視していたことが知られており、ブロッホマンは、ボイムラーがノールのゲッチンゲン大学退職に関与したことを示唆している^{*37}。彼は、自らが主宰する機関誌『国際教育誌』に掲載した論文「形式陶冶の限界」^{*38}の結論部において、次のようにノールの著作に言及している。

*35 Ders.: a.a.O.(1978)(8), S.227.

*36 ボイムラーのベルリン大学教授就任とシュプランガーの辞任問題については、次の文献に詳論されている。田代尚弘『シュプランガー教育思想の研究』風間書房、1995年、第五章、第六章。

*37 Blochmann,E.: a.a.O., S.177.

*38 Baeumler,A.: Grenzen der formalen Bildung. In: Internationale Zeitschrift für Erziehung, 5.Jg., 1935, SS.1-7, 110-120.

「叙述は、いわば超時間的な立場からなされた時代描写のように、興味深くもあるし、つまらないものでもある。・・・教育者は主観に責任を有する (Nohl 1935, S.161f.)。『主観』とはいったい何なのか、それはノールによって答えられていない。また彼によって、教育の基本的関係が具体化されることもない。彼はくり返し『自立した精神的姿勢』について語るのみである。」^{*39}

ボイムラーによれば、「主観は世代に課せられた歴史的課題から、教育者によってであろうとも、決して切り離されえない」のであって、教育の課題は、「主観と歴史、個と全体、自由と必然の深遠な連関」に根ざしている。「この課題の克服を断念する者は、実践的にも理論的にも歴史的民族共同体の外にある」^{*40}と見なされるのである。さらに続けて、「個人」的教育学から「全体」や「国家」の教育学への、ノールの転換もまったく評価されず、批判の標的となる。

「ナチズム革命の後に記されたこの著書の後書きで、ノールは教育学の二つの形式を区分する。個人的な汝を起点とするソクラテス的なものと、全体及びその秩序を起点とするプラトンのようなものである。1933年春、ドイツで教育学のソクラテス形式がプラトンのそれに転換したとノールは考える。しかし、そこで彼が付け加える注釈は、個々人の魂と意識の過小評価に対する警告である。・・・彼は、新たな国家の指導的教育者に警告を与えなければならないと考えているのだ。」^{*41}

ボイムラーの捉えたノールの姿は、「ペスタロッチーのエピゴーネン」であり、「エピゴーネンの体験能力のなさによって、彼は、古典の中であつて生動していたものを今日の現実的教育運動と関連づけて認識することもできず、大変動の時代に立ちつくしている」^{*42}とされるのである。

シュブランガーの弟子で、1938年からエルビング教員養成大学教授となったG. ギーゼによる書評は、さらに辛辣である。

「この叙述の限界は、今日のフェルキッシュな政治的教育科学の立場とはまったく異なった見方、評価がなされている点にある。ノールとノール学派は、彼ら自身この教育運動と、彼らによって構想された『教育学の自律性』の代表的人物である。確かにノールは、国民と国家、全体、世界観の客観的なものを、別の可能性として認識してはいる。しかし、彼自身にとって重要なのは一義的に主観であり、人間であり、個人である。・・・今日、『純粋に教育学的に』『自律的に』思考する者は、それ自体あの教育改革を特徴づける

*39 Ders.: a.a.O., S.120.

*40 Ders.: a.a.O., S.121.

*41 ebenda.

*42 ebenda.

『リベラリズム』にとらわれている。」^{*43}

ギーゼは、個人の主観的生命性の擁護を基準とする「自律的教育学」それ自体を批判し、この自律性の思考が「ノール自身を、徹底的学校改革者、マルクス主義教育学等の疑惑的現象を無批判に教育運動に数え入れるよう惑わしている」とする。そして、ノールが「精神的国家反逆者となったF. W. フェルスター^{*44}のような人物」さえ、「公民教育的意義」を評価することを、重大な問題であると指摘する^{*45}のである。同様に、ノールの左翼教育学への寛容さが批判的となる。

「ノールと彼の学派にとって、奇妙で特徴的なことは、当時もそして今日も『自律的な教育学的知識』(Nohl 1935, S.130)の名において、教育の宗派性に異議を唱えること、またよりもよって、1848年の理念の意味で統一学校を実現するために、かつてのドイツ教員組合(DLV)を教育学の擁護者としてたたえることである。彼によれば、教育の理念は教師に、『子どもを今日の一定の思考の対象にしない』(S.97)ことを命じているのである。周知の嫌悪すべき現象、左翼政党のドグマに染めつけようとするワイマル期の民主主義的、マルクス主義的教育は、彼の観点からは厳しく批判されることがない。この点で、『自律的教育学の姿勢』は、きわめて明白な政治的学校政策的立場を支持している。」^{*46}

所感的に述べる事が許されるなら、きわめて皮肉な評価と言わざるをえない。ノールの「自律的教育学」は、今日的視点からは、名目的「自律」ないし「政治的中立」を唱えることによって、結果として、ナチズムの台頭しつつあった現実を肯定するという、一定の政治的な選択をしたとされる。そのまったく同じ論理の裏返しで、ノール教育学は、左翼を選択したと、ナチズムの側から批判されているのである。

「ノールが、変革以来『習得』したことを示そうとする『後書き』も、うんざりさせるものだ。『自律的教育学』は・・・非政治的な外見をもった典型的なリベラリズムの政治的決定なのである。したがって、その立場から『精神の自由な活動』を放棄しないよう警告されたり、スパルタの陰の部分やいわんや宗教裁判が引き合いに出されたりすることはまんできない。・・・このような我々にとって異質なものとなった19世紀のメロディーは、ノールがいかにか『習得』していないかを示している。明らかに、『自律的教育学』に

*43 Giese,G.: Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie. In: Zeitschrift für Geschichte der Erziehung und des Unterrichts, 26.Jg., 1936, 245.

*44 Foerster, F.W.(1869.6.2-1966.1.9.) 1914年から1920年までミュンヘン大学教育学教授。キリスト教的倫理的平和主義の立場からの戦争政策批判により辞職させられた人物。

*45 Giese,G.: a.a.O., S.246.

*46 ebenda.

とって必要なのは、習得ではなく、根本的で完全な学び直しなのである。」^{*47}

ギーゼは結論として、ノールのこの著作はナチスの「国民革命」の前に著述されたのみならず、まさにこの革命によって克服された政治的教育学的心情によって貫かれているがゆえに、出版の必然性さえ疑われる、と評定するのである。ナチズム的教育学の側では、ノールの教育学はまったく存在意義を認められなかった。ノール自身が教育学の課題を、子どもの主観的生命性から民族共同体や国家への奉仕へと転換したとしても、それはやはりペスタロッチーの亜流として「個人主義的教育学」の域を出ないものと見なされたのである。その時点でのノールにとって、このような評価は自己の存在意義を否定されるほど、衝撃の大きいものであったと思われる。それは、『ドイツにおける教育運動とその理論』1948年版後書きの中で、あらためて上述のような批評を「金で動く批評家」たちのものと、書き留めていることから推測できる。それまで多くの弟子たちを指導し、時代の教育の中で一定の影響力を行使しえたノールは、その機能を喪失し、いまや自身の安全まで危険を感じるようになる。

2. 雑誌『教育』の編集をめぐる葛藤

ノールやリット、さらにシュプランガー、フリットナーなど精神科学的教育学派のナチス統治下における「精神的相貌」及び「布置」については、彼らの教育学クライスを形成する場となった雑誌『教育』の編集問題と関わって、小笠原、田代^{*48}によって精密に論究されている。1933年以降、『教育』は講読者獲得のために親ナチズム的編集方針を求める出版者とフリットナーをはじめとする編集者との間で葛藤が生じていた。その中で編集主幹フリットナーは、雑誌を非時局的な学問的性格に限定させることができないのなら、編集の任から降りたいと希望する。他の編集者はそれに同意せず、シュプランガーは雑誌を刊行し続け、時局的批判的論評も取り入れることが戦術的に重要であるとする。リットは明確な危機意識からナチズムに対する批判的立場を表明する。この間の彼らの「精神的相貌」には、田代の分析するとおり、一義的に断定できない微妙なものがある。

ノールは、雑誌を時局的なものとするにおいてはシュプランガー、リットと一致し、その意味でフリットナーに不満を抱き、編集方針の転換を迫る。ノールは、雑誌をより影響力のあるものにするため、次のような提案をする。

「第一に、まったく今日的な書評によって。とりあげる著作は、その月の内に出版されたものでなければならない。・・・しかも、危険なものであるがゆえに破り捨て、拒絶されるか、あるいは積極的に注目されるかする著作のみを。是か否かが明確になるように。中途半端なもの、曖昧なものは要らない。」^{*49}（1933年1月7日付け、フリットナー

*47 ebenda.

*48 小笠原道雄『現代ドイツ教育学説史研究序説』福村出版、1974年、257頁以下。田代尚弘、同上書、157頁以下。

*49 Blochmann, E.: a.a.O., S.169.

宛)

「第二に、時代の出来事への教育学的態度決定を。我々は今、十分な生動性を有しているだろうか。例えば、ヒトラーの『闘争』は無条件に論評されなければならなかったはずだ。反応は即時に雑誌の次の号でなされねばならなかった。」(同上)

ブロッホマンは、この時代ほどノールが「決定的に闘争的立場に立ったことはない」^{*50}と述べている。しかしその立場が、ブロッホマンの含意するように、ナチズムに対しての「闘争的立場」であったのかということについては、なお留保されねばならない。というのは、ノールはナチズムの圧倒的勢いに幻惑されたかのような、先にとりあげた彼自身の論稿「地方運動、東方救助と教育学の課題」を、雑誌に掲載するようフリットナーに強く求めているのである。

「鉄が熱いうちに打たれるように。今、我々が力強く活動することは政治的理由からも必然である。特にこの問題は今、動き出しているが、さらにより大きな高まりを必要とする。」^{*51} (1932年3月27日付け、フリットナー宛)

この論稿の掲載が、「学生たちが我々によって導かれ、扇動家によって導かれない」^{*52}ようにするためであったとしても、ナチズムに対する態度は依然としてアンビヴァレントのものである。ナチズムに対し批判的に距離を取る態度は、1934年になって現れる。ノールは、彼の信頼していた同僚が「強制的同質化」への同調と見なされる論稿を『教育』に投稿したとき、次のように述べている。

「このような不誠実さについては、今日の政治的時代の中でのマキャベリズム的手段として、予想しておかねばならないだろう。私はただ、この裏表のある空気の中で成長する青年たちを気の毒に思う。彼らがそれを見抜き、古い世代への敬意を犠牲にして、それを軽蔑することが期待される。」^{*53} (1934年9月27日付け、フリットナー宛)

このような状況の中でも、ノールは彼の弟子や友人たちに、彼らのポストを自ら放棄しないよう、常に可能なかぎり二重のエネルギーをもって教育活動を続けるよう、励ます。

「我々は大きな課題と義務を持っている。とりわけ子どもの保護、そして教育活動全般のために。それはどこでも中止できないし、拒否できない。我々は次の時代の義務と可能性の完全な計画を作らねばならないだろう。」^{*54} (1933年初め、E. ホフマン宛)

*50 Dies.: a.a.O., S.168.

*51 ebenda.

*52 ebenda.

*53 Dies.: a.a.O., S.176.

*54 Brief (1933). In: Herman Nohl Nachlaß, Cod. 645.

また、フリットナーが『教育』の編集主幹を辞そうとしたとき、次のように書き送る。

「あなたが『教育』の編集主幹を辞そうとするであろうことは、おそらく年内に起こりうる本当の不運だと思っていた。しかし、今それはまったく誤ったことに思える。それは単に立場を放棄することを意味し、我々すべてにとっての弱体化である。」^{*55}（1934年、フリットナー宛）

しかし、フリットナーは1936年を最後に編集から去り、ノール自身も1937年には編集者から退いた。1935年以降のノールは、直接的な教育学的言表よりも、『哲学入門』（1935）、『美的現実』（1935）、『性格と運命』（1938）、『道徳的根本体験』（1939）などの哲学、美学、人間学研究に力を注いだし、またそうせざるをえなかった。また『ベルタ・ノールとその両親』（1939）、『H. ノール1850-1929、家族の歴史』（1940）といった家族史の執筆に没頭することによって、内的亡命の道を選択したのであった。

3. ノールとリットの差異

ノールの場合と異なり、ナチズムに対しより明確な批判的態度をとったのは、リットである。ノールの態度との比較の意味で、ノールが、ナチズムへの同調を暗示する1933/34年冬学期の講義「国民教育の基礎」の写しを、リットの60歳の誕生日に贈った際の、両者の書簡を見ておきたい。ノールは講義の写しに添えて以下のように述べる。

「講義は次のような試みであった。最高の全体的緊張の瞬間に、我々の上を吹き荒れている巨大な運動に対する我々の教育学的姿勢を、私の講義を聴講する青年の前で価値あるものとする、その真理性を（宗教的）論難や弁明なしに主張することである。」^{*56}（1940年12月付け、リット宛）

それに対し、リットは、「（ノールは彼自身が思う以上に）よく自己の姿勢を守り、しかもその際、新たなものの中の承認されるべきものを評価し、構成することに成功した」^{*57}（1940年12月付け、ノール宛）と応答しながら、しかしまた彼のナチズムに対する批判的な立場から、続けて書き送っている。

「あなたのような人が新しいものにそれほど信頼して歩み寄り、それにそんなにも魂を吹き込む力を貸し与えることができるのを見ると、私がすでにしばしば問いかけてきたことを思い出す。もろ手をあげての歓迎が事態に別の経過をたどらせなかったのかと。私は常

*55 Blochmann, E.: a.a.O., S.170.

*56 Dies.: a.a.O., S.171.

*57 ebenda.

に否定的な答えに行き着く。・・・告知された新たな原理が、あなたがそれに付与した意味において理解され、作用するならば、それは我々にとってかぎりない幸福であろう。しかし私はすべてのことがそれから遠く隔たっていることを恐れる。」*58（1941年6月4日付け、ノール宛）

すでに明らかなように、ノールがナチズムの勢力になお肯定的側面を見いだし、教育的活動の余地を求めようとするところで、リットはそれを明確に拒否し、ナチズムへの抵抗の姿勢を強めていったのである。

私的な書簡と教育学テキストに見られる相反したノールの姿、ナチズムに対する矛盾した態度はどのように解釈されうるか。非連続性の立場では、ノールのナチズムへの同調はその圧倒的な勢いに一時的に幻惑された結果なのであり、その実体が見えたときノールは「内的亡命」の道を選ばざるをえなかったされる。しかし、ノールは「内的亡命」によりすぐには沈黙していなかったのである。むしろノールは、ナチス陣営から過去の遺物視され、リベラリズムに基づく個人主義的教育学として攻撃の危機にさらされそうになったとき、自らの教育学をさらに一步ナチズムの側に近づけるという選択をしたのではないか。それは彼自身の教育学を時代に適合させ、社会的承認を回復しようとする試みであり、ナチズムに対する自己保身的、迎合的反応であったと見なされる。しかし、このような反応は、ナチス陣営の側ではまったく拒否的に受けとめられた。ボイムラーは、ノールの教育学を「つまらないもの、古くさいもの」と書評する。ナチス政権期においても1937年まで、ノールはその職を維持してはいたが、かつての教育政策への影響力、政治当局への近さを失っていた。この意味でナチズム的教育学としての機能は認められないと考えられる。

*58 ebenda.

第2部 ナチズムとノール学派

ワイマル期からナチス政権期にかけてノール教育学の有していた機能を問おうとするとき、ノール自身の言表や活動を分析するのみならず、ノール学派と呼ばれる一群の教育(学)者集団の動静を明らかにすることは必要な作業である。ノール教育学の特質は、他の代表的精神科学的教育学者、シュプランガー、リット等に比し、明瞭な理論的特性と多数の構成員を擁した「学派」を意識的に形成したことにある。彼らは、様々な教育の領域で活動することにより、当時の教育状況ないし教育学の知識のネットワークに少なからぬ影響力を行使したのである。

第1章 アカデミズムの教育学とナチズム

1. ナチス権力掌握前後のドイツ教育学者 —全体像の数量的分析—

まず、テノルトの分析^{*59}によりながら全体像を概観する。

表①に示されるとおり、1931年から1940年の間にかなりの教育学者数の減少がある。これはナチスの教育政策、同質化に抵触する教育学者の解職や国外移住を反映するものである。しかし、数量変化は教育学者たちの活動分野において大きく異なっている。総合大学に属する人員が絶対数において増加し、全体に占める割合を倍増させているのに比し、教員養成や「その他(図書館員や著述家のほか、特に成人教育、社会教育分野における指導者たち)」の分野での減少が著しい。このことは、ナチスによる同質化政策が教員養成、「その他」分野でより強力であったことを物語っている。

また、1931年から1940年までに退職したり解職されたりした人数は、総合大学で半分以上、教員養成で8割以上、その他分野で9割以上にのぼっている。この傾向は、1940年までに60歳に達し、自然退職した可能性のある人員を考慮しても変わらない。1931年に総合大学で職を得ていた75人のうち41人が、1940年時点で60歳に達していなかった。その中で職を維持していたのは25人(61%)である。教員養成分野での変化はさらに激しい。1931年の172人のうち78人が、まだ60歳に達していなかったにもかかわらず、1940年に職を維持していた者はわずかに21人(27%)である。このことから、テノルトは、ナチス権力掌握前後の教育学の連続性はそれほど認められず、特に教員養成分野ではほとんど非連続であると結論づける^{*60}。

伝統的教育学からナチズム的教育学への転換は、総合大学においても認められる。確か

*59 Tenorth, H.-E.: Deutsche Erziehungswissenschaft 1930 bis 1945. In: Zeitschrift für Pädagogik, 32.Jg., Nr.3, 1986, SS.303-305.

*60 Ders. a.a.O.(1986), S.305.

に半数近くの者がその職を維持してはいたが、彼らはかつての教育政策への影響力、政治当局への近さを失っていた。その地位を占めたのはクリークやボイムラーであり、ボイムラーのベルリン大学政治教育学講座教授としての招聘は、シュプランガー並びに精神科学的教育学派の影響力失墜を示す象徴的な出来事であった。

表②には、1935年に初めて教育学者としての職を獲得し1940年までの間のみそれを維持していた人数が示されている。いわばナチス政権に承認された、この158人は1940年の教育学者数の56%を占めている。活動分野別に見ると、彼らは総合大学で4割近くを占めていたほかに、やはり教員養成分野での7割近い数がきわだっている。

表③では、テノルトの提示した数字を裏づけるため、ナチス政権掌握前後の主要なアカデミズムの教育学者たちの動静を調査してみた。1933年4月7日以降、「職業官吏の現状回復に関する法律」（職業官吏制度を愛国的なものにするために、①1918年11月9日以降、適切な資格なしに職についていた職業官吏、②非アーリア系の職業官吏は、退職させられる。）により、まず人種条項に抵触する者、社会主義、共産主義、精神分析の立場にあった教育者や教育学者たちが解職される。さらに新カント派やキリスト教的教育学者たちが解職されたり国外移住を余儀なくされたりする。1937年には、精神科学的教育学の主要人物たち、ノール、リットが早期退職し、シュプランガーは「水曜会講演」に認められるようにナチズムと距離をとりはじめ^{*61}、フリットナーは西洋文化史研究に沈潜するようになる。アカデミズムの教育学はこのような事実から、少なくとも1933年以降においてはナチズムと一線を画しており、また彼らがかつて保持していた社会的な機能と承認を失っていたと見なされるのである。また、アカデミズムの教育学には属していないが、A. ライヒヴァイン^{*62}をはじめ、多くの左翼系教育者、精神分析学に依拠する教育実践家たちが、ナチスの犠牲になっている。

*61 田代尚弘『シュプランガー教育思想の研究』風間書房、1995年、220頁以下。

*62 ライヒヴァインについては、次の文献に詳論されている。アムルンク、U. 著、対馬達雄・佐藤史浩訳『反ナチ・抵抗の教育者 — ライヒヴァイン 1898—1944 —』昭和堂、1996年。

表① 教育学者数

| | 1931年 | | 1940年 | | 1931-40年継続在職者 | |
|------|-----------|-----------|-----------|-----------|---------------|--------------------|
| | 人数 (人) | 比率 (%) | 人数 (人) | 比率 (%) | 人数 (人) | 31 ÷ 31-40年 (%) |
| 総合大学 | 75 | 16,3 | 85 | 30,14 | 36 | 48 |
| 単科大学 | 35 | 7,6 | 21 | 7,44 | 9 | 25,7 |
| 教員養成 | 172 | 37,47 | 104 | 36,87 | 31 | 18,02 |
| その他 | 174 | 37,9 | 72 | 25,53 | 14 | 8,04 |
| 計 | 459 | 100 | 282 | 100 | 90 | 19,06 |

(出典：Tenorth, H.-E. (1986), SS.303-305. より論者抜粋／原資料は Kürschners Deutscher Gelehrtenkalender による。この時点で未だ哲学者と教育学者の区分が明瞭でないなど、資料批判の上での限界はあるが、変動の傾向は明らかであると思われる。)

表② 1935年に初めて登場し1935年と1940年にのみ教育学者と見なされた者
(ナチス政権によって就任が承認された教育学者)

| | 人数 (人) | 1940年の教育学者 数にしめる比率(%) |
|------|-----------|--------------------------|
| 総合大学 | 33 | 38,82 |
| 単科大学 | 9 | 42,85 |
| 教員養成 | 71 | 68,26 |
| その他 | 45 | 62,5 |
| 計 | 158 | 56,02 |

(出典：同上)

表③ 1933年前後の主要教育学者

精神科学的教育学

- E. シュブランガー (ベルリン Uni.1919-)
- Th. リット (ライプツィヒ Uni.1919-1937 年早期退職)
- W. フリットナー (キール Uni.1926-, ハンブルク Uni.1929-)
- H. ノール (ゲッチンゲン Uni.1920-1937 早期退職)
- E. ブロッホマン (ハレ P.A.1930-33.9.14.解職、1934 イギリス移住)
- E. ヴェーニガー (キール、アルトナ、フランクフルト a. M. P.A.1929-33.5.22. 休職、9.21.解職)
- C. ボンディ (ゲッチンゲン Uni.Assi.1923-25、Prof.1930-33 教授資格停止)
- O. F. ボルノウ (ゲッチンゲン Uni.Assi.1931-33,ギーセン Uni. 1938-45)

経験科学的教育学

- A. フィッシャー (ミュンヘン Uni. 1914-1937 解職)
- P. ペーターゼン (イエナ Uni.1923-)
- O. クロー (テュービンゲン Uni.1923- ベルリン Uni.1942-)
- R. ロッホナー (ヒルシュベルク H.f.L.1934-)

新カント派教育学

- J. コーン (フライブルク Uni.1901-39 イギリス移住)
- R. ヘーニヒスヴァルト (ブレスラウ Uni.1916-30、ミュンヘン -1931 解職、一時
ダッハウ拘束後 1938 アメリカ亡命)
- A. ペッツェルト (ブレスラウ Uni.Doiz. ボイテン P.A.1930-1934 解職)

キリスト教的教育学

- F. X. エッガースドルファー (パッサウ Uni.1933.4 解職)
- R. グアルディーニ (ブレスラウ 1923-1939 解職)
- F. シュナイダー (ボン P.A.1928-1934 解職)

ナチス教育学

- E. クリーク (フランクフルト P.A.1928-33, ハイデルベルク Uni.1934-)
- A. ボイムラー (ベルリン Uni.1933-)
- Th. ヴィルヘルム (DAAD 1933-36, オルデンブルク H.f.L.1937-, 1935-『国際教育誌』編集者)

* Uni.=大学、P.A.=教育アカデミー、H.f.L.=教員養成大学

2. 教員養成における同質化

国民学校教員の養成に関して、ワイマル憲法では「高等教育に一般に適用される諸原則に従って、ライヒにおいて統一的に規定される」（143条2）とされたが、実際には各ラントで異なった形態が存続した。保守勢力の強いバイエルン、ヴェルテンベルクでは従来とおりの「師範学校（Lehrerseminare）」、左翼系政党の強いテューリンゲン、ザクセン、ハンブルク、ヘッセン等では、大学入学資格の取得を条件に総合大学もしくは単科大学で教員養成が行われた。プロイセンでは、その中間に位置する独立した教員養成機関、教育アカデミー（Pädagogische Akademie）が新たに設置された。

教育アカデミーは、プロイセン文相C. H. ベッカー（民主党系の無党派）の主導のもとに設置され、主として国民学校教員、また社会教育職員を養成する機関である。大学入学資格を条件とし、新人文主義の理念に基づいた2年間の専門教育で、理論的実践的な教育学教育をめざすものとされていた。1926年からエルビング、キール、ボン、フランクフルト a. M. 等、15校が開設されたが、1932年に経済危機による緊縮財政政策のため、ブレスラウ、ハンブルク＝アルトナ、ハノーファー等、8校が閉鎖された。1933年5月、ナチスの政権掌握後、教育アカデミーは教員養成大学（Hochschule für Lehrerbildung）に改組される。ライヒ（兼プロイセン）文相B. ルストは、ラウエンブルク教員養成大学の設立式典において次のように述べている。

「教師諸君。諸君はドイツ民族教育の突撃隊長である。諸君は自由主義的な大学の姿に目を奪われず、偉大な未来のドイツ民族共同体に圧倒的多数のドイツ国民を結合させる任務に邁進せよ。教育アカデミーの教育課程は、すべてに媚態を示す科学的構成に名をかり、ドイツ民族を解体に導こうとするマルクス主義的教師、過去の政体の試みを、明らかに反映したものである。」^{*63}

「社会主義的科學、社会主義的教育學、これらの科目は、まったく新たな教科—民族學、国防地理學、国境地方學、種族學—に代わる。」^{*64}

教員養成大学の学生はナチス突撃隊、ないしナチス学生同盟に所属することを義務づけられていた。ナチスが「赤色」アカデミーと呼んだハレ教育アカデミーも教員養成大学に改組後、ヒルシュベルクに移転される。この都市から田園へという移動もナチズムの反文明的傾向の表れであった。その際、ハレ教育アカデミー専任教官19人のうち、解職を免れたのは2人だけである^{*65}。解職者の中に、ナチス抵抗運動者として刑死するライヒヴァイン、ノールの弟子でオックスフォードへの移住を余儀なくされるブロッホマンが含まれている。ハレ教育アカデミー学長、J. フランケンベルガーに代わって、H. フロイデントールがヒルシュベルク教員養成大学の学長に選任された。U. アムルンクによれば、フロイデントールは、1932年までキール教育アカデミーで教授していた人物であるが、

*63 白根孝之『ナチス教育改革の全貌』中和書院、1936年、32頁。

*64 同上

*65 ライヒヴァイン、U.、同上書、218頁。

教育アカデミーの削減過程で文相A. グリメ（社会民主党）によって一時退職させられていた。彼の専門は民俗学で「人種的基盤に立ったドイツ現代の政治的民俗学としての『わが闘争』」（1936年論文）が示すように、きわめて政治的な人選であった^{*66}とされる。

1937年から、中等教育学校教員志望者も大学入学前、2セメスター間の教員養成大学での就学が義務づけられた。1940年、教員養成大学は寄宿制の「教員養成施設（Lehrerbildungsanstalten）」に改変され、さらにナチズム教育の徹底化が図られた。

第2章 ノール学派とナチズムの距離

—ゲッチングン教育学インスティテュート—

1. ノール学派（ゲッチングン教育学派／ゲッチングン・クライス）とナチズム

（1）学派の形成

ノールは、1919年、同じくディルタイの弟子であったG. ミッシュの援助を得て、ゲッチングン大学に招聘される。1920年から「教育学に特段の配慮をする実践的哲学」の担当者として教授活動を開始し、1922年にはプロイセンにおいて初めて開設された教育学講座の正教授となった。着任の際、ノールはミッシュに宛てて「我々は、他の人々から格別の敬意を払われるような確固とした精神科学の城を築きたい」^{*67}と書き送り、「学派」形成の意志を垣間見せている。事実、ディルタイの生命哲学を基盤とし、青年運動やイエナでの民衆大学指導経験のあるノールの講義は、他の教授たちの「赤いノール」という評をよそに、学生たちの人気を集め^{*68}、彼のもとで多くの弟子たちが育っていった。また、教育と教育学の自律性を主張し、教育学を各種学校教育、社会教育を含む大きな領域に拡張しようとしたノールの関心に従って、弟子たちは様々な分野で活動の場を見いだしていった。それは民衆大学、国民学校、中間学校、女子中等学校、田園教育舎、青少年保護局、学務局、さらに教員養成のために設置されつつあった教育アカデミー等、多様な領域に及んだ。教育アカデミーの中でも、とりわけハンブルク＝アルトナ及びハレではノールの弟子や同僚たちが主導的な位置を占めたとされている^{*69}。

ブロッホマンの回顧によれば、彼らはヴェーザー河畔リッポルズベルクのセミナーハウスにしばしば集い、ノールを囲んで多様な教育活動領域の情報を交換しあった。このようなノールを中心とした教育（学）者集団が有力な学派として認められていたことは、ノールに宛てられたパラートの書簡に「ベルリンでは大きな畏敬の念をもって『ノール学派』

*66 ライヒヴァイン、U.、同上書、248、249頁。

*67 Blochmann, E.: Herman Nohl 1879-1960. Göttingen 1969, S.97.

*68 ebenda.

*69 Weniger, E.: Herman Nohl zum Gedächtnis. Göttingen 1961, S.21.

について語られている」*70(1929年12月22日付け、パラート宛)と述べられていることから伺える。

ノール学派の教育研究活動は、ノールが編集者として参加していた雑誌『教育』や、『教育学ハンドブック』全5巻(1928-1936)に数多く収録された彼らの論文に表れている。また、学派としての形態を周囲に公認させたものは、ノールがナチス政権によって退職させられる1937年までに指導し、完成させた53件の学位論文であり、その中には後年教育学者として知られる人物として、E. ホフマン、G. ガイスラー、W. シャイブ等の名前が見いだせる。論文の多くが、『ゲッチンゲン教育学研究』シリーズ(1930-1936年の間に21号)として公刊されており、内容領域としては、ドイツ運動に関わる哲学的思想史的研究が多いことは当然として、芸術教育、女性教育、身体教育等、現実的教育課題に関わるものが特徴的である*71。さらに、いわゆるノール学派と見なされる教育学者は、学位指導を受けたE. ホフマン等に限られず、ゲッチンゲンでノールの助手を務めたE. ヴェーニガー、O. F. ボルノウや幼児教育学者E. ブロッホマン、社会教育学者C. ボンディ等、さらに多数にのぼる。これらのアカデミズムの教育学者に加えて、より多数の実践教育者たちが上にあげた社会教育をはじめとする広範な領域で活動を展開していた。

(2) ナチズムへの対応

ワイマル期末の教育研究活動において大きな位置を占めていたノール学派は、ナチス政権の登場によっていかなる対応を迫られることになったのであろうか。従来の見方では、ノールの1937年の早期退職に象徴されるように、彼らは「理性的共和主義者」であったがゆえにナチス政権から敵対視され、一時的な外面的適応はあったとしても、ナチズムとノール学派との親和性は認められないというものであった。ブロッホマンによれば、「教育アカデミーで教授していた多くのノールの弟子たちが解職されたが、その理由は彼らがノール学派であるということ、また同質化に抵抗するような自律的教育学を主張することにあつた」*72。事実、彼女自身、1930年から就いていたハレ教育アカデミー教授の職を、1933年4月7日に布告された「職業官吏の現状回復に関する法律」(非アーリア人条項)によって解かれ、イギリスへの移住を余儀なくされている。また、ノールのもとで助手を務め、社会教育学の講義を担当していたC. ボンディは、1933年に教授資格を停止されてしまう。彼は少年刑務所指導員としての活動にも従事しており、この分野でのノールの重要な協力者であった。1933年以降、彼はM. ブーバーのユダヤ人成人教育施設で活動し、1938年には短期間ブッヘンバルトに収容された後、アメリカへ移住することとなる。

しかし、このような事例は全体としてのノール学派のナチズムとの隔たりを証明し、いわゆる道徳的責任を免罪するものではない。むしろ、ナチス政権下のゲッチンゲン大学教

*70 Blochmann, E.: a.a.O., S.143.

*71 Weniger, E.: Bibliographie Herman Nohl. Weinheim 1954.

*72 Blochmann, E.: a.a.O., S.162.

育学インスティテュートの歴史を叙述したラツケによれば、そこには少なくとも一時的なナチズムへの同調があり、とりわけ若手の研究者の間には明確な支持的雰囲気があったとされている^{*73}。1931年4月から1933年6月まで助手を務めたボルノウは、「A. ヒトラーとナチズム国家に対するドイツ大学教官の信仰告白」とそれに付帯した「世界の学者への呼びかけ」に署名した一人である。1933年の彼の論文「政治的学問と政治的大学」^{*74}は、学問と大学を根本的に政治化し大学を全体主義の枠内に取り込もうとするナチス的同質化政策の理論的基礎づけを試みようとしたものと見なされうる。また、ノールの退職前まで助手を務めていたJ. ブラーケは、1936年の論文「高等学校の課題と教師教育」^{*75}の中で、ナチズムに基づく新しい生活と民族を形成する教師像を描き、ナチス体制に対する親和的態度を明瞭に示している。

ノール学派は、決してナチズムと遠く隔たった位置にあったのではないし、当時の教育研究動向に対して無機能な状態に甘んじてもいなかった。ノール学派の内部でも、当然、国外に去らなければならなかった、ないし去ることのできた人々と、国内にとどまっていた人々との、ナチズム体験の差異が現れている。では、国内にとどまったノール学派の中でも最有力の弟子と見なされていたヴェーニガーの場合、その対応はいかなるものであつたらうか。ここでヴェーニガーにとりわけ注目するのは以下の理由による。まず、彼がノールのゲッチンゲン着任当時からともに青年民衆大学を指導し、初代助手としてノールに協力していたこと、またノールによる唯一の教授資格付与者であつて、後にはゲッチンゲン大学教育学教授職を受け継ぐ、「正統な」後継者であることがあげられる。

さらにヴェーニガーは、後述する伝記的事実によって、これまでナチズムの責任問題から免責されてきた。また、戦後ドイツ教育学において主要な位置を占めた批判理論的教育学者の多くが、彼のもとで学問研究を開始し、ヴェーニガーを精神科学的教育学とイデオロギー批判的教育学との結節点として位置づけた教育学研究上の視点からも、従来、ナチズムとの関係性を問われずにいたのである。その結果、教育の理論と実践の自律性を中心テーゼとし、自由民主主義的な「市民」「公民」教育を標榜するヴェーニガー教育学の別の側面、すなわち「軍隊教育学」とそのナチズムとの関連性はほとんど完全に無視されてきたと言える。これまでこの問題への取り組みが閉ざされていた背景には、先にあげた戦後教育学者世代の研究関心の他に、ヴェーニガーの「軍隊教育学」関係の文献が彼の主著とされる『理論と実践における教育の独自性』^{*76}に一切収録されず、軍事研究雑誌に散逸的に残されたままであつたということも考えられよう。近年ようやくヴェーニガー著作

*73 Ratzke, E.: Das Pädagogische Institut der Universität Göttingen. In: Becker, H., u. a. (Hrsg.): Die Universität Göttingen unter dem Nationalsozialismus. München 1987, 206.

*74 Bollnow, O. F.: Politische Wissenschaft und politische Universität. In: Neue Jahrbücher für Wissenschaft und Jugendbildung, 9. Jg., 1933.

*75 Brake, J.: Die Fachschaft als Gemeinschaftsform studentischen Lebens. In: Die Erziehung, 11. Jg., 1933.

*76 Weniger, E.: Die Eigenständigkeit der Erziehung in Theorie und Praxis. Weinheim 1952, 1964 (3).

集第5巻として『教師教育、社会教育学、軍隊教育学』^{*77}が刊行され、並行して彼の「軍隊教育学」を問い直そうとする論考が著されている（例えば、Hoffmann/Neumann 1992^{*78} u.1993^{*79}, Beutler 1995^{*80}, Siemsen 1995^{*81}）。本論では、これらの先行研究に依拠しつつ、以下においてナチス政権下のヴェーニガー教育学の特質を解明したい。

2. ナチス政権下のヴェーニガー教育学

(1) ナチス政権下のヴェーニガーの動静

ワイマル期末からナチズム期にかけてのヴェーニガーの伝記的事実は、彼の教育学の性格の一端を伺わせるものとして興味深い。ヴェーニガーは1929年4月1日から1930年3月31日まで、キール教育アカデミーの教授であった。その後、1932年3月31日までハンブルク＝アルトナ教育アカデミーの校長兼教授、同年4月1日からフランクフルト a. M. 教育アカデミー校長兼教育学・哲学教授となった。この地位は、1933年5月22日、ナチス政権によって強制的に休職させられるまで続く。1933年9月7日、ヴェーニガーは「職業官吏の現状回復に関する法律」第4項（政治的不適格性）により解職される。1934年1月17日、ヴェーニガーの異議申し立てにより復職するが、続いての期間、彼自身の希望で、1938年まで休暇がくり返し延長される。

ヴェーニガーの解職の原因としては、以下のことが伝えられている。元プロイセン文相 C. H. ベッカーが1933年2月に死没した際、ヴェーニガーは、彼を教育アカデミーの校長に任じてくれたベッカーのために追悼演説を行った。その中で彼は、「ベッカー文相は、教育アカデミーに他の教育施設のどこにも見いだせないような固有の法則に従って発展する自由を与えた。彼はそれを政治的な日常の闘争から守ったのだ」^{*82}とベッカーを讃えている。教育の自律性を擁護するこのような言葉がナチスにとってヴェーニガーの政治的不適格性を示すものとして受けとられたとされている。ヴェーニガーは、彼自身のこのような回想によって、これまでナチズムへの責任問題から免責されてきたのである。

復職後、彼は予備役的な高等学校一級教諭として「教授」称号と身分を保持したまま、実際の勤務を免除されていた。この期間は彼の「軍隊教育学」研究のために費やされることになる。このような休暇が可能となった背景には、国防省の支援があったことが指摘されている^{*83}。1938年4月、彼はフランクフルト a. M. のレッシング・ギムナジウ

*77 Ders.: *Lehrerbildung, Sozialpädagogik, Militärpädagogik*. Weinheim 1990.

*78 Hoffmann, D./ K.Neumann (Hrsg.): *Bildung und Soldatentum. Die Militärpädagogik Erich Wenigers und die Tradition der Erziehung zum Kriege*. Weinheim 1992.

*79 Dies.: *Tradition und Transformation der Geisteswissenschaftlichen Pädagogik. Zur Re-Vision der Weniger-Gedenkschrift*. Weinheim 1993.

*80 Beutler, K.: *Geisteswissenschaftliche Pädagogik zwischen Politisierung und Militarisierung -Erich Weniger*. Frankfurt/Main 1995.

*81 Siemsen, B.: *Der andere Weniger*. Frankfurt/Main 1995.

*82 Weniger, E.: a.a.O. (1964(3)), S.269.

*83 Siemsen, B.: a.a.O., S.5.

ム一級教諭の職に就くが、戦争が始まるまでのそこでの彼の仕事は、2回の軍事教練と乗馬事故による入院によって中断される。1939年9月1日から、彼はフランクフルト a. M. の国防第1師団、予備軍大尉となった。その後、師団将校として1941年4月から C. H. フォン・シュトゥルプナーゲル将軍の率いる第17軍参謀部に所属し、パリに駐屯する。連合軍によるフランスの解放後、1944年4月から1945年5月8日の崩壊まで、ヴェーニガーは予備軍将校としてゲッチンゲンに駐在していた。大戦の間も、ヴェーニガーは「軍隊教育学」研究のために自由な時間と活動を保証されていた。B. シュベックによるヴェーニガーの伝記では以下のように記述されている。「彼は特別な任務を得た。それは彼がさらに軍隊教育学研究のための経験を蓄積できるよう、各地の部隊に派遣されることを可能とした。・・・彼はこの間、各地の部隊で講演を行った。それ以外に彼の仕事の自由を妨げるものはなかった」*84。また、第二次世界大戦後もヴェーニガーは、国防軍の顧問として「軍隊教育学」に関わり続けたということも、付言されるべき事柄であろう。

このような伝記的事実から、「軍隊教育学」がヴェーニガーにとってけっして副次的な問題領域ではなかったことが明らかになる。またとりわけナチス政権期の彼の著述出版活動からは、この時期むしろ集中的に「軍隊教育学」問題に取り組んでいたことが推測されるのである。

(2) ヴェーニガーの「軍隊教育学」

① 1930年以前のヴェーニガーにおいて、「軍隊教育学」的観点で重要な言明は、教授資格論文『歴史教授の基礎』*85(1926)と論文「1914年からの歴史教授理論」*86(1926)の中にわずかに見いだせる。そこでヴェーニガーが確認していることは、青年の戦争への献身が歴史教授の成果として評価されるということである。ここで語られているのは、1914年に志願兵として第1次大戦に参加し、1918年に若き少尉として帰還したが、軍事的敗北とそれに続く崩壊的状况を克服しきれなかったヴェーニガー自身の「戦争体験」である。ヴェーニガーにとって、軍隊は彼自身の自己理解、価値観のモデルとなるものであると同時に、彼の行為と思考を規定し、無制約的に承認されるべきものであった。また、国家にとって軍隊は力を体現し、個々人にとってはある種の「男らしい団結」を表すもの、「男子」が他のどこにもないほど完全に「責任」や「真価の発揮」を可能とする制度と見なされている。軍隊はその歴史的意義を戦争においてはじめて獲得する。ヴェーニガーはこのことを永遠にくり返される人類の歴史の事象として解釈する。「戦争体験」は個々人に対してつまらない通俗的な生を高揚させ、限界状況においてまさに喜びを感じとる機会を提供するものとされるのである。

② ヴェーニガーの自覚的な「軍隊教育学」研究は、1930年の雑誌『教育』に著さ

*84 Schwenk, B.: Erich Weniger – Leben und Werk –. In: Gedänkschrift. Göttingen 1968, S.22.

*85 Weniger, E.: Die Grundlagen des Geschichtsunterrichts. Leipzig 1926.

*86 Ders.: Die Theorie des Geschichtsunterrichts bis 1914. In: Die Erziehung, 1. Jg., 1926.

れた「戦争の表象—体験、記憶、伝承」^{*87}(1930)によって開始される。この論文の主題は、将来の国防教育のために「経験」の有効性を問うこと、「戦争体験」に内包された陶冶力を発見することであった。彼は「経験」に基づいた理論の構築をめざすが、それは単なる偶然的な経験ではない。彼によれば「経験」は主観的な経験から導かれるのではなく、現実、実践、生を把握し、理論的な叙述へともたらされねばならないものであった。それを可能にするのは、彼にとって経験的な科学ではなく、歴史的な事象の解釈学的分析、理解という方法なのである。1930年論文では、戦争小説やその他の散文、ドキュメントフィルムをテキストとし、解釈学的に把握された「経験」が提示されている。また、彼は「戦争体験」がその本質に基づいて、正しく再び獲得されるのはいかにしてか、を問う。「戦争体験」、すなわち「生と死の極限状態の全体」を獲得させようとする従来の様々なやり方は、彼には不十分なものと見なされた。問題は、このような様々なものに対して、基軸としてそこに他のすべてが関係づけられる本来的特徴的体験が存在するか否かであった。ヴェーニガーは戦争状態の人間を、「あらゆる日常性を超えたある種神秘的な例外状態にあるもの」として描く。すなわち「前線体験」こそが中核的体験としての意味を付与されるのである。

③ 続いての「軍隊教育学」研究として、「国防教育と戦争経験」^{*88}(1938)及び「ゲーテと将軍」^{*89}(1942)の二つの論文があげられる。「軍隊教育学」の根本問題は、新米兵士がいかにして教育されねばならないか、ということであった。そのためにヴェーニガーが重視するのは、ここでも「戦争経験」である。「戦争経験」は陶冶論的観点から、前線の兵士にとっても次世代への媒介という意味においても、根本的な重要性を有するものとされる。すなわち、「事柄を充足させる努力において、彼らは意識的無意識的に、それまで彼ら自身知ることのなかった力を発展させる。そのことは、戦争という課題を遂行する過程でほとんどすべての能力が有意義に用いられることに表れている」^{*90}のである。同様に、主観的な「戦争体験」も教育学的に重要な活動連関に位置づけられる。つまり、能力は戦争行為に基づいて問われ、戦争が「陶冶の過程」に置き換えられるのである。ヴェーニガーの「軍隊教育学」を批判的に分析しているポイトラーによれば、「戦争体験」によって形成される力の開放をめざし、戦争の記憶を「陶冶の問題」に転換することは、戦争を国民の歴史の生産的成果として解釈することにつながり、さらに青年を新たな戦争準備へと教育することになる^{*91}とされる。

ヴェーニガーにとって、戦時の教育の方が「危急」をともしなわぬ平時よりもいっそう有効であると考えられた。彼は、「戦時に教育が中断されるというのはよく言われることであるが、誤った考え方である」として、「人は平和時に達成された教育や養成のレベル

*87 Ders.: Das Bild des Krieges. Erlebnis, Erinnerung, Überlieferung. In: Die Erziehung, 5. Jg., 1930.

*88 Ders.: Wehrmachtserziehung und Kriegserfahrung (1938). In: Ders.: a.a.O. (1990), S.202.

*89 Ders.: Goethe und Generale (1942). In: a.a. (1990), S.270.

*90 Ders.: a.a.O. (1938). In: (1990), S.204.

*91 Beutler, K.: a.a.O., S.102.

を、最善のものであるかのように信頼する。しかし戦争の経験は、逆のことが正しいということを見せている。火中においてはじめて指揮官と部隊の真の教育が始まるのである」と述べるのである。ポイトラーは、このようなヴェーニガーの理論の中に、教育学を戦争の遂行に役立てようとする彼の明瞭な意志が読みとれると指摘する。

しかし、同時に確認しておかねばならないことは、この時点までのヴェーニガーの「軍隊教育学」において、ナチズムとの親和性がほとんどと言ってよいほど認められないことである。確かに彼は、軍隊と戦争を教育学的に価値ある現象として高く評価している。けれども、当の軍隊が奉仕すべき国家の現実的な姿、また間近にあった実際の戦争への洞察が、彼の「軍隊教育学」にはまったく欠落しているのである。あたかもドイツ国防軍がナチス政権と別物であり、迫りつつあった戦争がドイツ軍兵士と青少年世代の陶冶の過程であるかのような「無邪気さ」（ポイトラーの言葉を借りるなら）が見てとれる。ただし、このことはヴェーニガーとナチズムの隔たりを証明する根拠とはなりえない。伝記的事実にも示されていたように、彼はナチス政権下の国防軍と比較的に近い関係にあったし、彼の「軍隊教育学」研究がそれを支援するものであったことも明らかなのである。

④ ナチズムに対する抑制的な態度は、『ドイツ軍兵士の教育』^{*92}(1944)において大きく変化する。まずそこでは、すでに表明されていた「軍隊教育学」の理念が、若干のナチズム的色彩を帯びてくり返されている。例えば、ヴェーニガーは次のように述べる。「国防の義務はすべての兵士に、彼らが民族共同体の成員として無条件に尽力するはずであるという信頼に基づいて、名誉を与えるものである。ここで『無条件に』とは、彼らが成員としてこの共同体に帰属しているという意識以外に何の理由もなく、自身の生命を犠牲にしてまで民族と祖国のために献身することを意味している」^{*93}。

問題は、最後の二つの章であり、ここではじめてヴェーニガーはナチズムへの完全な賛同を明らかにする。そこでは、ナチス体制を支持する多くのイデオロギー的要求が提示されている。軍隊、民族、ナチズムが歴史的に偉大な遺産として同値のものとされるのである。ヴェーニガーは「新たなドイツ的軍人精神」^{*94}の前提として、プロイセン的なものと「ドイツ的心情」をあげるが、同時にそれらが単に「ドイツ人の基本的な生活形式」によるのみならず、「フューラーと上級指揮官の個人的な功績」であると称揚する。さらに、「フェルキッシュな現存在の潮流」あるいは「同じ血が脈打つ」^{*95}といった言葉に示されるように、ヒトラーの『わが闘争』からの詳細な引用がなされている。ナチス軍事体制は、くり返し理想像として引き合いに出されるグナイゼナウやクラウゼヴィッツといったプロイセンの偉大な将軍たちと同一視されるのである。「我々は新たな国防の時代の始まりに立っている。その萌芽を我々にもたらしたのはナチズム的理念の根本的な力である」

*92 Weniger,E.: Die Erziehung des deutschen Soldaten(1944). Berlin 1944. ただし出典は、Siemsen,B.: a.a.O.に収録されたヴェーニガーのテキスト抜粋資料による。

*93 Weniger,E.: a.a.O.(1944). In: Siemsen,B.: a.a.O., S.163.

*94 Weniger,E.: a.a.O.(1944). In: Siemsen,B.: a.a.O., S.173.

*95 Weniger,E.: a.a.O.(1944). In: Siemsen,B.: a.a.O., S.174.

というヴェーニガーの言葉は、ナチズムに対する彼の姿勢を明確に示すものである。ここにおいてポイトラーは、ヴェーニガーがイデオロギー的にナチス政権に迎合し、ナチスにとって単なるシンパ以上に有用な人物となっていたと結論づける^{*96}。

3. ナチズム期ノール学派の精神的位相

以上の考察から明らかになったことは、ヴェーニガーが「軍隊教育学」の構築を自らの主要課題とし、そこでは軍隊と戦争に重要な教育学的意味が付与されていたということである。この意味づけには、戦争の中で獲得される「体験」及び「経験」に対する彼の生命哲学的、解釈学的な把握が関与していた。また、彼の「軍隊教育学」とナチズムとの関連性についても、個々の言表に関しては、とりわけ『ドイツ軍兵士の教育』(1944)において、その迎合的親和性が確認された。しかし、両者の関係構造、内実的關係性、さらにナチズム的教育に対してヴェーニガーが持ちえた機能については、未だ多くの問が残されている。

例えば、ポイトラーは両者の連続性を明らかなものとし、ナチスが先導する戦争へと青年を駆り立てたヴェーニガーの道徳的責任を断罪するが、それによって全体的な関係構造が解きほぐされたわけではない。確かに「無邪気な」までの軍隊教育への賛同、ドイツ国防軍の神話化が、現実のナチス支配下の軍事体制を補強する役割を果たしたことは、ポイトラーの指摘するとおりであろう。しかし、国防軍の神話化のためにヴェーニガーが、プロイセン陸軍の将軍、将校たちの道徳性をくり返し引用していたことは留意されねばならない。ヴェーニガーは1938年までの「軍隊教育学」論文では、それをナチス政権と結びつけることなく理想像として描き出していた。このプロイセン的なものは、シュランガーの「水曜会」におけるナチス支配への精神的抵抗の基盤となりえたものであるし^{*97}、また同じく「水曜会」のメンバーであったL. ベック陸軍参謀総長は、プロイセン的軍人精神から1944年7月20日の「ヒトラー暗殺未遂事件」に関与し自死している。ヴェーニガーが参謀将校を務めていたフランス占領軍司令官フォン・シュトゥルプナーゲル将軍も、逮捕を免れたもののベック将軍に賛同していた。このような保守派エリートによるナチス抵抗運動が、そのまま運動関係者のナチズムとの距離を保証するものでないことは言うまでもない。むしろそれ自体の限界性やプロイセン的なものとナチズムとの通底性が問われなければならないであろう。ただし、このような複合的視点をとることによって、ナチズムへの迎合的言辭から直ちに連続性を断定したり、有罪判定を下したりすることを免れ、関係構造を解明する可能性が開けるのではなからうか。

集団としてのノール学派の分析に関しても同様のことが言えよう。先に見たように学派の内部でも、ドイツ国外に退去せざるをえなかったブロッホマンやボンディのような人々と、国内にとどまっていたヴェーニガー、ボルノウ等の多くの人々とがいた。前者をナチズムの被害者とし、後者を「そこにいた」がゆえに加害加担者とする二分法的断罪は、かえって全体としての関係構造を覆い隠してしまうものではなからうか。このことは、戦後

*96 Beutler, K.: a.a.O., S.108.

*97 田代尚弘、同上書、33頁、及び220頁以下。

ドイツにおいて論争となった「国外亡命者」と「国内亡命者」との間の倫理的優越性問題にもつながるものである。とりわけ国内にとどまっていたヴェーニガーやボルノウの場合、この時期の彼らの教育研究活動を、複合的視点からより精細に分析することが求められる。これはけっして、彼らをナチズムに対して道徳的に免責するような証拠を探そうとするものではない。重ねて言うなら、道徳的な判定とは別のレベルで、まず彼らがナチズムという時代の中で思考し行為したことを、そしてその意味と機能を、解き明かすことが必要なのである。このような作業が、教育学とナチズムの関係構造を全体的文脈において認識する手がかりとなるのではなかろうか。

主要参考・引用文献

1 - 1. ヘルマン・ノール公刊著書

- Nohl, Herman : Sokrates und die Ethik. Tübingen und Leipzig 1904.
: Die Weltanschauungen der Malerei. Jena 1908.
: Pädagogische und politische Aufsätze. Jena 1919.
: Sitl und Weltanschauung. Jena 1920.
: Zur deutschen Bildung. Göttingen 1926.
: Jugendwohlfahrt. Sozialpädagogische Vorträge. Leipzig 1927.
: Pädagogische Aufsätze. Jena, 1929 (2.Aufl.).
: Landbewegung, Osthilfe und die Aufgabe der Pädagogik. Leipzig 1933.
: Einführung in die Philosophie, Frankfurt/Main 1935.
(邦訳：三井善止・長谷川洋二訳『哲学入門』玉川大学出版部、1996年。)
: Die ästhetische Wirklichkeit. Frankfurt/Main 1935.
: Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie. Frankfurt/Main 1935
(1978, 8.Aufl.). (1.Auflage erschien im Handbuch der Pädagogik, Bd.1,1933.)
(前半部"Die pädagogische Bewegung in Deutschland"邦訳：平野正久、大久保智、
山本雅弘訳『ドイツの新教育運動』(世界新教育運動選書20) 明治図書、
1987年。)
: Charakter und Schicksal. Eine pädagogische Menschenkunde. Frankfurt/Main 1938
(1947, 3.Aufl.)
: Die sittlichen Grunderfahrungen. Eine Einführung in die Ethik. Frankfurt/Main 1939.
: Pädagogik aus dreißig Jahren. Frankfurt/Main 1949.
: Die pädagogische Aufgabe der Gegenwart. Frankfurt/Main 1949.
: Friedrich Schiller. Frankfurt/Main 1954.
: Erziehergestalten. Göttingen 1958.
(邦訳：島田四郎訳『人物による西洋教育史』玉川大学出版部、1990年。)
: Vom Sinn der Kunst. Göttingen 1961.
: Aufgabe und Wege der Sozialpädagogik. Weinheim 1965.
: Ausgewählte pädagogische Abhandlungen (Hrsg. von J. Offermann). Paderborn 1967.
: Die Deutsche Bewegung. Vorlesungen und Aufsätze zur Geistesgeschichte von 1770-1830
(Hrsg. von O.F. Bollnow und F. Rodi). Göttingen 1970.
(一部邦訳：島田四郎監訳『ドイツ精神史 — ゲッティンゲン大学講義』
玉川大学出版部、1997年。)
: Das historische Bewußtsein (Hrsg. von E. Hoffman und R. Joerden). Göttingen 1979.

1 - 2. ノール編集文献

- Nohl, Herman (Hrsg.): Hegels theologische Jugendschriften. Tübingen 1907.
(邦訳：久野昭・水野建雄訳『ヘーゲル初期神学論集 I・II』以文社、
1973年。)
: Friedrich Schleiermacher 2 Bde.. Leipzig 1913.
: Wilhelm Dilthey. Die Jugendgeschichte Hegels und andere Abhandlungen zur
Geschichte des deutschen Idealismus, Gesammelte Schriften Bd. IV. Leipzig und
Berlin 1921.
(邦訳：久野昭・水野建雄訳『ヘーゲルの青年時代』以文社、1976年。)
: Göttinger Studien zur Pädagogik. Göttingen, Langensalza und Weinheim 1923/60.
: Handbuch der Pädagogik (Hrsg. gemeinsam mit Ludwig Pallat). Langensalza,
Berlin und Leipzig.

- Bd.4. Die Theorie der Schule und der Schulaufbau 1928.
 Bd.2. Die biologischen, psychologischen und soziologischen Grundlagen der Pädagogik. 1929.
 Bd.5. Sozialpädagogik. 1929.
 Bd.3. Allgemeine Didaktik und Erziehungslehre. 1930.
 Bd.1. Die Theorie und die Entwicklung des Bildungswesens. 1933.
 : Kleine Pädagogische Texte. Langensalza und Weinheim 1930/61.
 Einleitung von H. Nohl : Wilhelm Dilthey. Über die Möglichkeit einer allgemeingültigen pädagogischen Wissenschaft. 1930.
 : Max Frischeisen-Köhler. Philosophie und Pädagogik. 1931.
 : Die Pädagogik Herbarts. Allgemeine Pädagogik aus dem Zweck der Erziehung abgeleitet. 1951.
 : Der Schulkindergarten. 1958.
 : Wilhelm Dilthey. Die Philosophie des Lebens. Eine Auswahl aus seinen Schriften 1867-1910. Frankfurt/Main 1946.
 (邦訳 : 久野昭監訳『生の哲学』以文社、1987年。)
 (Zeitschrift) : Zeitschrift für Kinderforschung (Mitwirkung) Ab.28. Bd. 1923/44.
 : Die Erziehung (Hrsg. gemeinsam mit A.Fischer, W.Flitner, Th.Litt und E.Spranger), 1.Jg. 1925/26 bis 12.Jg. 1936/37.
 : Die Sammlung (Hrsg. gemeinsam mit O.F.Bollnow, W.Flitner und E.Weniger), 1.Jg. 1945/46 bis 15.jg. 1960.

1 - 3. ノール遺稿

ゲッティンゲン大学ノール遺稿文書集 (Nachlaß Herman Nohl 1879-1960)

- Nohl, Herman : Brief an Erika Hoffmann 1924/60 (Cod.645).
 : Rundbrief an den Kreis der Freunde 1930/59 (Cod.646a).
 : Geschichte der Pädagogik (Cod.824).
 : Zur Geschichte der Pädagogik (Cod.825).
 : Allgemeine Pädagogik 1920/21 (Cod.826).
 : Die Grundlage der nationalen Erziehung. Eine Vorlesung im Wintersemester 1933/34 (Cod.830).
 : Die zweifache deutsche Geistigkeit und ihre pädagogische Bedeutung. Vortrag am 28.5.1932 (Cod.836).

マールブルク大学教育学図書室蔵

- Nohl, Herman : Berta Nohl und ihre Kinder Johann und Josephine Oser (Manuskript). 1939.
 : Herman Nohl 1850-1929 und die Geschichte seiner Familie (Manuskript). 1940.
 : Die Erziehung des deutschen Volks (Vortrag am 12/14. 4. 1950).
 : Erziehung als Lebenshilfe (Beitrag für "Blätter für Lehrerfortbildung", 1942).

2. ヘルマン・ノール研究文献

- Bartels, Klaus : Die Pädagogik Herman Nohls in ihrem Verhältnis zum Werk Wilhelm Diltheys und zur heutigen Erziehungswissenschaft. Weinheim und Berlin 1968.
 Ders. : Herman Nohl. In: Speck, J (Hrsg.): Geschichte der Pädagogik des 20. Jh. II. Stuttgart 1978.
 Bernett, Hajo : Herman Nohl und die Reform der deutschen Leibeserziehung. In: Henze, W. (Hrsg.): B.Zimmermann, H.Nohl, K.Hahn. Duderstadt 1991.
 Blochmann, Elisabeth : Herman Nohl zum 75. Geburtstag. In: Zeitschrift für Pädagogik, 1.Jg. 1955.
 Dies. : Herman Nohl in der pädagogischen Bewegung seiner Zeit 1879-1960. Göttingen 1969.
 Bollnow, Otto Friedrich : Herman Nohl und die Pädagogik. In: Zeitschrift für Pädagogik, 25. Jg. Nr.5., 1979.

- Ders. : Der Begriff des pädagogischen Bezug bei Herman Nohl. In: Zeitschrift für Pädagogik, 27.Jg. Nr.1, 1981.
- Finckh, Hans Jürgen : Der Begriff der <<Deutschen Bewegung>> und seine Bedeutung für die Pädagogik Herman Nohls. Frankfurt/Main 1977.
- Flitner, Wilhelm : Persönlichkeit und Lebenswerk Herman Nohls. In: Pädagogische Rundschau, 4.Jg. 1949/50.
- Froese, Leonhard : Erinnerung an Herman Nohl. In: Pädagogische Rundschau, 50.Jg. Heft 4., 1996.
- Geißler, Georg : Herman Nohl (1879-1960). In: Scheuerl, H. (Hrsg.) : Klassiker der Pädagogik II. München 1979.
- Hager, Fritz-Peter : Zur Bedeutung der Philosophie für die autonome Pädagogik bei Dilthey und Nohl. In: Pädagogische Rundschau, 51.Jg. Heft 3, 1997.
- Hentig, Hartmut von, u.s.w. (Hrsg.) : Herman Nohl. Wirkung und Gestalt. Zu seinem 100. Geburtstag. In: Neue Sammlung, 19. Jg. 1979.
- Hackewitz, Waltraut von : Das Gesellschaftskonzept in der Theorie der "Pädagogischen Bewegung"; ein ideologiekritischer Versuch am Werk Herman Nohls. Berlin 1964.
- Lee, Jong-Seo : Der Pädagogische Bezug. Frankfurt/Main, 1989.
- Lang, Michael : Die Bewegung der religiösen Dimension in Denken Herman Nohls unter besonderer Berücksichtigung seiner Pädagogik. München 1973.
- Ludwig, Harald : Elemente eines partizipatorischen Denkstils in der Pädagogik Herman Nohls. In: Pädagogische Rundschau, 40.Jg. Heft 4., 1986.
- Ders. : Schule im Spannungsfeld von Bildungstheorie und Sozialpädagogik — Zur Schule in der Pädagogik Herman Nohls. In: Gesamtschuleinformationen 21.Jg. Heft 1/2., 1990.
- Luttringer, Klaus : Dialektik und Pädagogik. Das stillschweigend Vorausgesetzte des dialektischen Denken in der pädagogischen Theorie Herman Nohls. Frankfurt/Main 1980.
- Marotzki, Winfried : Konstruktion oder "Lebendigkeit des Lebens"? Das Verhältnis Herman Nohls zur Psychoanalyse Sigmund Freuds. In: Zedler, Peter / König, Eckard : Rekonstruktionen pädagogischer Wissenschaftsgeschichte. Weinheim 1989.
- Matthes, Eva : Herman Nohl: Über Leistung, Gehorsam, Pflicht. In: Neue Sammlung, 34.Jg. Heft 2, 1994.
- Mohr, Konrad : Die Pädagogik Herman Nohls. Zell und Mosel 1954.
- Ders. : Die Pädagogik Herman Nohls. In: Bollnow, O.F. (Hrsg.) : Erziehung und Leben. Heidelberg 1960.
- Reble, Albert : Zum 75. Geburtstag Herman Nohls. In: Pädagogische Rundschau, 9.Jg. 1954.
- Thöny, Giosua : Der Erzieher oder die führende und bildende Kraft. Die Bedeutung des Erziehers in der Pädagogik von Nohl. In: Pädagogische Rundschau, 44.Jg. Heft 2., 1990.
- Ders. : Philosophie und Pädagogik bei Wilhelm Dilthey und Herman Nohl. Stuttgart 1992.
- Ders. : Geisteswissenschaftliche Studien zu Dilthey und zur Pestalozzi- Rezeption Nohls. Bern 1997.
- Weniger, Erich : Bibliographie Herman Nohl. Weinheim 1954.
- Ders. : Herman Nohl zum Gedächtnis. In: Göttinger Universitätsreden, 1961.
- Zimmer, Hasko : Die Hypothek der Nationalpädagogik. Herman Nohl, der Nationalsozialismus und die Pädagogik nach Auschwitz. In: Jahrbuch für Pädagogik 1995. Frankfurt/Main 1995.
- 伊藤一也「ヘルマン・ノールの教育学における『牧歌的なるもの』の概念」、『教育哲学研究』第57号、1988年。
- 同上「『教育運動』とヘルマン・ノールの教育学」、『愛媛大学教育学部紀要』第I部教育科学、第37号、1991年。
- 大久保智「ヘルマン・ノールにおける生の構造」、『大阪大学人間科学部紀要』第5巻、1979年。
- 大津親人「芸術的教育学における生へのアプローチ — H. ノールの美的現実思想を中心として—」、『福岡学芸大学紀要』第14号、教職科編、1964年。
- 菊池龍三郎「ノールの教育的人間学の性格」、『教育方法学研究』第2集、1967年。

- 同上 「ヘルマン・ノールと社会教育運動（１） — 民衆大学運動を中心に —」、『茨城大学教育学部紀要』第２２号、１９７３年。
- 同上 「ノールとシュプランガーの教育学における主観と客観の関係について」、『茨城大学教育学部紀要』第２４号、１９７５年。
- 同上 「ヘルマン・ノールにおける青年の問題」、『教育方法学研究』第４集、１９７５年。
- 同上 「ヘルマン・ノールにおける教育学の自律性（その一）」、『教育方法学研究』第５集、１９７９年。
- 同上 「ヘルマン・ノールの教育的関係論（一）」、『茨城大学教育学部紀要』第２８号、１９７９年。
- 土橋 寶 「ヘルマン・ノールの教育理論における生の範疇（前・後編）」、『鳥取大学教育学部研究報告』（教育科学）第３７巻、第１号、１９９５年。
- 同上 「ヘルマン・ノールにおける教育的関係の理論に関する一考察」、『鳥取大学教育学部研究報告』（教育科学）第３８巻、第１号、１９９６年。
- 林 忠幸 「ノール」、杉谷雅文編著『現代のドイツ教育哲学』玉川大学出版部、１９７４年。
- 同上 「H. ノール」、天野正治編『現代に生きる教育思想 ５ — ドイツⅡ —』ぎょうせい、１９８２年。
- 林 量俣 「『教育の相対的自律性』論に関する一考察 — ヘルマン・ノールの所説を手がかりにして —」、『東京教育大学大学院教育学研究集録』第１７集、１９７７年。
- 平野正久、大久保智、山本雅弘 「ノールにおける教育運動の思想」、ヘルマン・ノール、同左著訳『ドイツの新教育運動』明治図書、１９８７年。
- 毛利 猛 「H. ノールにおける『教育的関係』の概念とその今日的意義」、『京都大学教育学部紀要』第３１号、１９８５年。
- 坂越正樹 「ヘルマン・ノールの教育的人間論 — 人間存在の解釈学としての教育的人間論 —」、中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第２３号、１９７８年。
- 同上 「ヘルマン・ノールにおける教育の相対的自律性理論」、中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第２４号、１９７９年。
- 同上 「ノール学派における教育の相対的自律性理論 — H. ノール, E. ヴェーニガーにおける国家観と教育の相対的自律性 —」、中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第２５号、１９８０年。
- 同上 「ノールにおける改革教育学運動の理論的把握に関する一考察 — 運動の『統一』と共同体の把握を中心に —」、広島大学教育学部『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』第６巻、１９８０年。
- 同上 「ヘルマン・ノールにおける両極的思考について — ノールの『ドイツ運動』研究と教育学研究の連続性 —」、広島大学教育学部『広島大学教育学部紀要』第１部、第３０号、１９８２年。
- 同上 「H. ノールの『教育的関係』に関する一考察 — 『教育的関係』の独自性と『教育と教育学における相対的自律性』の要請 —」、広島大学教育学部『広島大学教育学部紀要』第１部、第３７号、１９８８年。
- 同上 「ドイツ改革教育運動に関する一考察 — H. ノールのカノンを中心に —」、教育哲学会編『教育哲学研究』第６８号、１９９３年。
- 同上 「ナチズムとH. ノール教育学（１）」、中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第３９巻、第１部、１９９４年。
- 同上 「ナチズムとH. ノール教育学（２） — 『民族共同体』への志向 —」、中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第４０巻、第１部、１９９５年。
- 同上 「『ドイツ改革教育学』に関する一考察 — 歴史学論議と教育学論議 —」、中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第４１巻、第１部、１９９６年。

- 同上 「ナチズムと教育学 — ヘルマン・ノールのケーススタディ —」、教育思想史学会年報『近代教育フォーラム』第6号、1997年。
- 同上 「ナチズムとH. ノール教育学(3) — ノール学派とE. ヴェーニガーの『軍隊教育学』 —」、中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第43巻、第1部、1998年。

3. 関連文献

- Amlung, Ullrich : Adolf Reichwein 1898 - 1944. Frankfurt/Main 1991.
(邦訳：対馬達雄、佐藤史浩訳『反ナチ・抵抗の教育者 —ライヒヴァイン 1898—1944—』昭和堂、1996年。)
- Baeumler, Alfred: Grenzen der formalen Bildung. In: Internationale Zeitschrift für Erziehung, 5.Jg.,1936.
- Berg, Christa / Oelkers, Jürgen / u.s.w. : Symposion: Bilanz erziehungshistorischer Forschung: Pädagogik und Nationalsozialismus. In: Zeitschrift für Pädagogik, 25.Beiheft, 1990.
- Beutler, Kurt : Geisteswissenschaftliche Pädagogik zwischen Politisierung und Militarisierung -Erich Weniger. Frankfurt/Main 1995.
- Blankertz, Herwig : Die Geschichte der Pädagogik. Wetzlar 1982.
- Böhm, Winfried : Zur Einschätzung der reformpädagogischen Bewegung in der Erziehungswissenschaft der Gegenwart. In: Pädagogische Rundschau, 28.Jg. Heft 7, 1974.
- Böhm, Winfried / Oelkers, Jürgen : Reformpädagogik Kontrovers. Würzburg 1995.
- Crimman, Ralph P.: Erich Weniger und Oskar Hammelsbeck. Weinheim 1986.
- Dahmer, Ilse / Klafki, Wolfgang (Hrsg.) : Geisteswissenschaftliche Pädagogik am Ausgang ihrer Epoche - Erich Weniger. Weinheim 1968.
- Dudek, Peter : "Der Rückblick auf die Vergangenheit wird sich nicht vermeiden lassen". Opladen 1995.
- Dudek, Peter / Rauch, Thilo / Weeren, Marcel : Pädagogik und Nationalsozialismus. Bibliographie. Wiesbaden 1995.
- Feidel-Mertz, Hildegard : Pädagogik im Exil nach 1933. Kassel 1990.
- Flitner, Andreas : Reform der Erziehung. München 1992.
(邦訳：森田孝監訳『教育改革 二〇世紀の衝撃』玉川大学出版部、1994年。)
- Flitner, Wilhelm / Kudritzki, Gerhard : Die deutsche Reformpädagogik 2 Bde.. Düsseldorf und München 1961/62.
- Flessau, Kurt-Ingo / Nyssen, Elke / Pätzold Günter : Erziehung im Nationalsozialismus. Köln 1987.
- Gamm, Hans-Jochen : Führung und Verführung. Pädagogik des Nationalsozialismus. Frankfurt/Main 1984 (2.Aufl.).
- Gaßen, Helmut : Geisteswissenschaftliche Pädagogik auf den Wege zu kritischer Theorie. Weinheim 1978.
- Giese, Gerhardt: Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie. In: Zeitschrift für Geschichte der Erziehung und des Unterrichts, 26.Jg., 1936.
- Giesecke, Hermann : Hitlers Pädagogen. Weinheim 1993.
- Grunder, Hans-Ulrich : Reform der Erziehung. Eine Auseinandersetzung mit Andreas Flitner. In: Zeitschrift für Pädagogik, 40.Jg. Nr.6, 1994.
- Heckmann, Charlotte : Begleiten und Vertrauen. Frankfurt/Main 1995.
- Henning, Uwe / Leschinsky, Achim (Hrsg.) : Enttäuschung und Widerspruch. Die konservative Position Eduard Sprangers im Nationalsozialismus. Weinheim 1991.
- Heiber, Helmut: Universität unterem Hakenkreuz. Teil 1., Der Professor im Dritten Reich. 1991.
- Herrmann, Ulrich (Hrsg.) : >>Neue Erziehung<<->>Neue Menschen<<. Weinheim 1987.
- Herrmann, Ulrich/ Oelkers, Jürgen : Pädagogik und Nationalsozialismus. Weinheim 1989.
- Herrmann, Ulrich : Einleitungs Statements und Ergänzungen. In: Zeitschrift für Pädagogik, 25.Beiheft, 1990.
- Hoffmann, Dietrich / Neumann, Karl (Hrsg.) : Bildung und Soldatentum. Die Militärpädagogik Erich Wenigers und die Tradition der Erziehung zum Kriege. Weinheim 1992.

- Ders. : Tradition und Transformation der Geisteswissenschaftlichen Pädagogik. Zur Re-Vision der Weniger-Gedenkschrift. Weinheim 1993.
- Hohmann, Joachim S, / Langer, Hermann : "Stolz, ein Deutscher zu sein...". Frankfurt/Main 1995.
- Hojer, Ernst : Nationalsozialismus und Pädagogik. Umfeld und Entwicklung der Pädagogik Ernst Kriecks. Würzburg 1997.
- Horn, Klaus-Peter : Pädagogische Zeitschriften im Nationalsozialismus. Weinheim 1996.
- Huschke-Rhein, Bernhard : Das Wissenschaftverständnis in der geisteswissenschaftlichen Pädagogik. Stuttgart 1979.
- Kanz, Heinrich : Der Nationalsozialismus als pädagogisches Problem. Frankfurt/Main 1990 (2.Aufl.) .
- Keim, Wolfgang (Hrsg.) : Pädagogen und Pädagogik im Nationalsozialismus — Ein unerledigtes Problem der Erziehungswissenschaft. Frankfurt/Main 1990.
- Ders. : Erziehung unter der Nazi-Diktatur, 2 Bde.. Darmstadt 1997.
- Keim, Wolfgang / Schonig, Bruno : Zur Ambivalenz der Reformpädagogik. In: Pädagogik und Schulalltag, 52.Jg. Nr.2, 1997.
- Klafki, Wolfgang : Die Pädagogik Theodor Litts. Königstein/Ts. 1982.
- Ders. (Hrsg.) : Verführung - Distanzierung - Ernüchterung. Weinheim 1988.
- Ders.: Bericht über das Podium: Pädagogik und Nationalsozialismus. In: Zeitschrift für Pädagogik, 25.Beiheft, 1990.
- Ders. : Geisteswissenschaftliche Pädagogik. Kurseinheit 1/2/3/4. Fernuniversität in Hagen 1991 (2.Aufl.) .
- Krieck, Ernst : Grundlegende Erziehung. Erfurt 1930, 1934 (3) .
- Kunert, Hubertus : Deutsche Reformpädagogik und Faschismus. Hannover 1973.
- Kupfer, Heinrich: Der Faschismus und das Menschenbild der deutschen Pädagogik. In: Otto,H-U./ Sünker, H. (Hrsg.) : Sozialarbeit und Faschismus.1986.
- Lassahn, Rudolf : Das unerschlossene Erbe der Reformpädagogik. In: Pädagogische Rundschau, 38.Jg. Heft 3, 1984.
- Langewiesche, Dieter / Tenorth, Heinz-Elmar (Hrsg.) : Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte. Bd V. 1918-1945. München 1989
- Lenzen, Dieter (Hrsg.) : Pädagogik und Geschichte. Weinheim 1993.
- Lingelbach, Karl-Christoph : Erziehung und Erziehungstheorien im nationalsozialistischen Deutschland. Frankfurt/Main 1987.
- Michael, Berthold : Schule und Erziehung im Griff des totalitären Staates. Göttingen 1994.
- Müller,Helmut-Gerhard: Elisabeth Blochmann (1892 — 1972). Marburg 1992.
- Neumann, Karl (Hrsg.) : Erich Weniger — Leben und Werk. Göttingen 1987.
- Oelkers, Jürgen : Pädagogischer Liberalismus und nationale Gemeinschaft. In: Zeitschrift für Pädagogik, Beiheft 22, 1988.
- Ders. : Die grosse Aspiration. Darmstadt 1989.
- Ders. : Reformpädagogik. Weinheim 1989.
- Ders. : Erziehung als Paradoxie der Moderne. Aufsätze zur Kulturpädagogik. Weinheim 1991.
- Oelkers, Jürgen / Schulz, Wolfgang K.: Pädagogisches Handeln und Kultur. Aktuelle Aspekte der geisteswissenschaftlichen Pädagogik. Bad Heilbrunn 1984.
- Otto, Hans-Uwe / Sünker, Heinz (Hrsg.) : Soziale Arbeit und Faschismus. Bielefeld 1986.
- Pehnke, Andreas : Ein Plädoyer für unser reformpädagogisches Erbe. In: Pädagogik und Schulalltag, 47.Jg. Nr.1, 1992.
- Plake, Klaus : Reformpädagogik. Wissenssoziologie eines Paradigmenwechsels. Münster 1991.
- Ratzke,Erwin: Das Pädagogische Institut der Universität Göttingen. In:Becker,H.usw. (Hrsg.) :Die Universität Göttingen unter dem Nationalsozialismus. 1987.
- Röhrs, Hermann : Die Reformpädagogik. Ursprung und Verlauf in Europa. Hannover 1980.
- Scheibe, Wolfgang : Die Reformpädagogische Bewegung. Weinheim 1978 (6.Aufl.) .
- Schneider, Christian / Stillke Cordelia / Leineweber, Bernd : Das Erbe der NAPOLA. Hamburg 1996.

- Schonig, Bruno : Irrationalismus als pädagogische Tradition. Weinheim 1973.
- Schnorbach, Hermann : Lehrer und Schule unterem Hakenkreuz. Königstein/Ts. 1983.
- Schubert-Weller, Christoph : Hitlerjugend. München 1993.
- Siemsen, Barbara : Der andere Weniger. Frankfurt/Main 1995.
- Tenorth, Heinz.-Elmar: Zur deutschen Bildungsgeschichte 1918-1945. Köln 1985.
- Ders. : Deutsche Erziehungswissenschaft 1930 bis 1945. In: Zeitschrift für Pädagogik, 32.Jg., Nr.3, 1986.
- Ders. : Geschichte der Erziehung. Weinheim 1988 (2.Aufl.) .
- Ders. : Pädagogisches Denken. In: Langewiesche, D./H.-E. Tenorth (Hrsg.): Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte. Bd V.1918-1945. München 1989.
- Ders. : Wahrheitsansprüche und Fiktionalität. In: Lenzen, D. (Hrsg): Pädagogik und Geschichte. 1993.
- Ullrich, Heiner : Die Reformpädagogik. In: Zeitschrift für Pädagogik, 36.Jg. Nr.6, 1990.
- Vennebusch-Beaugrund, Theresia : Die Sammlung. Zeitschrift für Kultur und Erziehung. Frankfurt/Main 1993.
- Weber, Bernd : Pädagogik und Politik vom Kaiserreich zum Faschismus. Königstein/Ts. 1979.
- Weniger, Erich : Die Grundlagen des Geschichtsunterrichts. Leipzig 1926.
- Ders. : Wehrmachtserziehung und Kriegserfahrung. Berlin 1938.
- Ders. : Neue Wege im Geschichtsunterricht. Frankfurt/Main 1949.
- Ders. : Die Eigenständigkeit der Erziehung in Theorie und Praxis. Weinheim 1952.
- Ders. : Ausgewählte Schriften. (Ausz. Schonig, B.). Weinheim 1975.
- Ders. : Erziehung, Politik, Geschichte. Weinheim 1990.
- Ders. : Lehrerbildung, Sozialpädagogik, Militäropädagogik. Weinheim 1990.
- アスムス、W. 著、島田四郎、福井一光訳『ナチ弾圧下の哲学者 リヒャルト・クローナーの軌跡』玉川大学出版部、1992年。
- 新井保幸「イデオロギーとしての『純粋教育科学』 - E. クリークにおける『教育科学』と『全体主義』の関係 -」、教育哲学会編『教育哲学研究』第41号、1980年。
- 同上 「『改革教育学』とシュプランガー」、筑波大学教育思想研究会『教育と教育思想』第11集、1991年。
- 太田和敬『統一学校運動の研究』大空社、1992年。
- 小笠原道雄『現代ドイツ教育学説史研究序説』福村出版、1974年。
- 小野清美『テクノクラートの世界とナチズム -近代超克のユートピア-』ミネルヴァ書房、1996年。
- 金田健司「教育者としての共同体と教育学 - E. クリークの教育者論を手掛かりに -」、筑波大学教育思想研究会『教育と教育思想』第16集、1996年。
- 川瀬邦臣「ドイツ新教育とナチスの教育 - その連続性をめぐって -」、『東京学芸大学紀要』第1部門 教育科学、第45集、1994年。
- クラフキ、W. 著、小笠原道雄編訳『教育・人間性・民主主義』玉川大学出版部、1992年。
- 栗原優『ナチズムとユダヤ人撲滅政策』ミネルヴァ書房、1997年。
- ゲイ、P. 著、亀嶋庸一訳『ワイマール文化』みすず書房、1970年。
- コルプ、E. 著、柴田敬二訳『ワイマール共和国史』刀水書院、1987年。
- 佐野誠『ヴェーバーとナチズムの間』名古屋大学出版会、1993年。
- ゾントハイマー著、河島幸夫、脇圭平訳『ワイマール共和国の政治思想』ミネルヴァ書房、1976年。
- 高沼秀正「ドイツ新教育運動における『児童からの教育学』について」、『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第16巻、1970年。
- 田代尚弘「ファシズム期シュプランガーの『政治的・教育学的』立場」、日本教育学会『教育学研究』第52巻、第2号、1985年。

- 同上 「1933年の国家社会主義下における『科学的教育学』派」、『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』第39号、1990年。
- 同上 「1933年の国家社会主義下における『科学的教育学』派（その2）」、『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』第40号、1991年。
- 同上 『シュプランガー教育思想の研究 —シュプランガーとナチズムの問題—』風間書房、1995年。
- 田村栄子『若き教養市民層とナチズム』名古屋大学出版会、1996年。
- 対馬達雄「ナチス体制下の教育的抵抗 —ライヒヴァインとティーフェンゼー農村学校—」、岩波書店『思想』第833号、1993年。
- テノルト、H. — E. 著、小笠原道雄、坂越正樹監訳『教育学における「近代」問題』玉川大学出版部、1998年。
- 長尾十三二編『新教育運動の生起と展開』明治図書、1988年。
- 同上編 『新教育運動の理論』明治図書、1988年。
- 同上編 『新教育運動の歴史的考察』明治図書、1988年。
- 名古屋大学教育史研究会「ドイツ・改革教育学運動の諸特徴（I）」、『名古屋大学教育学研究科教育論叢』第22号、1978年。
- 野田宣雄『教養市民層からナチズムへ』名古屋大学出版会、1988年。
- バイエルヘン、A. D. 著、常石敬一訳『ヒトラー政権と科学者たち』岩波書店、1980年。
- ハーバーマス、J.、ノルテ、E. 他著、三島憲一他訳『過ぎ去ろうとしない過去』人文書院、1995年。
- 平野正久「『ドイツ新教育運動』研究の現状と課題」、『大阪大学人間科学部紀要』第20巻、1994年。
- フィッシャー、W. 著、加藤栄一訳『ヴァイマルからナチズムへ』みすず書房、1982年。
- フライ、N. 著、芝健介訳『総統国家』岩波書店。1994年。
- ブロイエル、H. P. 著、平野一郎監訳『大学知識人の思想史』黎明書房、1971年。
- フロム、E. 著、佐野哲郎、佐野五郎訳『ワイマールからヒトラーへ』紀伊国屋書店、1991年。
- ヘラー、H.、ゲルバー、H.、スメント、R.、ライブホルツ、G. 著、宮本盛太郎他訳『ヴァイマル民主主義の崩壊』木鐸社、1980年。
- ポイカート、D. 著、木村靖二、山本秀行訳『ナチス・ドイツ —ある近代の社会史—』三元社、1991年。
- 同上著、小野清美、田村栄子、原田一美訳 『ワイマル共和国 —古典的近代の危機—』名古屋大学出版会、1993年。
- 宮田光雄『ナチ・ドイツの精神構造』岩波書店、1991年。
- 村田昇『シュプランガー教育学の研究』京都女子大学研究叢26、1996年。
- 望田幸男、田村栄子『ハーケンクロイツに生きる若きエリートたち』有斐閣、1990年。
- モッセ、ゲオルグ L. 著、佐藤卓己、佐藤八寿子訳『大衆の国民化』柏書房、1994年。
- 山崎高哉『ケルシェンシュタイナー教育学の特質と意義』玉川大学出版部、1993年。
- ラカー、W. 著、柴田敬二訳『ファシズム 昨日・今日・明日』刀水書院、1997年。
- レーヴィット、K. 著、秋間実訳『ナチズムと私の生活』法政大学出版局、1990年。

平成9／10年度文部省科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））

研究成果報告書

課題番号 09610261

研究代表者 坂越正樹（広島大学教育学部）

1999年2月